公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第268集

柏原市

大県郡条里遺跡３・山ノ井遺跡

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

公益財団法人　大阪府文化財センター

序　　文

本書は、当センターが柏原市法善寺４丁目で平成 27 年度に実施した寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

平成 23 年度より発掘調査が実施され、今回は３次目の調査となります。法善寺多目的遊水地の予定地は生駒山扇状地から沖積低地にあたります。生駒山西麓から扇状地にかけては、古くは縄文時代早期より集落が営まれていました。古墳時代には府内屈指の鉄器生産遺跡として著名な大県遺跡、古代には東高野街道に沿うように「河内六寺」と称される寺院が建立されるなど、大和と河内をつなぐ要衝の地であったことを示す多くの遺跡が立地しています。しかしながら､低地部は厚い堆積物に覆われており、これまでその実態があまりよく分かっていない地域でした。

これまでの２次にわたる調査では縄文時代の河川が見つかり、河川が埋没した後には縄文時代晩期の集落が営まれるなど、徐々にその姿が明らかになりつつあります。また、表層に良好に残る条里型地割の名残はこの地を特徴づけるものといえますが、今回の調査でも地割に則った水田が古代より綿々と耕され続けていることが追認できました。また、墨書土器や漆付着土器、軒丸瓦など周辺に寺院や役所といった公的施設があることを示唆する遺物も出土しています。

最後になりましたが、調査にあたっては、地元の皆様をはじめ、大阪府八尾土木事務所、大阪府教育委員会、柏原市教育委員会など関係諸機関、ご指導、ご助言を賜りました多くの方々に感謝申し上げますとともに、今後とも当センターの調査事業に、より一層のご理解、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成 28 年 4 年

公益財団法人　大阪府文化財センター
理事長　田邉　征夫

例　　言

1．本書は、大阪府柏原市法善寺４丁目地内に所在する大県郡条里遺跡 15 － 1 調査区、山ノ井遺跡 15 － 1 調査区の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴い、大阪府八尾土木事務所から委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。

3．発掘調査、整理作業の受託契約、受託期間、および調査体制については以下のとおりである。

受託契約名

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県郡条里遺跡（その３）・山ノ井遺跡（その１）発掘調査

受託契約期間　平成 27 年８月３日～平成 28 年４月 28 日

現地調査期間　平成 27 年８月３日～平成 27 年 11 月９日

遺物整理期間　平成 27 年 11 月 10 日～平成 28 年４月 28 日

調査体制　事務局次長 江浦　洋　調整課長 岡本茂史　調査課長 岡戸哲紀

副主査 島崎久恵　専門員 片山彰一（写真室）

4．本書で用いた現場写真は調査担当者が撮影し、遺物写真については、写真室が担当した。

5．調査に際しては、大阪府教育委員会、大阪府八尾土木事務所のご指導、ご協力を得た。

6．本書の執筆および編集は島崎が行った。

7．本調査に関わる図面・遺物・写真などの資料は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡　　例

1．標高は東京湾平均海面（T.P.）を用いた。

2．座標は世界測地系を使用し、平面直角座標系第Ⅵ座標系に準拠する。座標単位は全てメートルであり、図中では単位を省略している。

3．本書で用いた北は座標北である。

4．現地調査ならびに遺物整理の方法は、当センターの定めた『遺跡調査基本マニュアル』2010 に準拠した。

5．土色標記は小山正忠・竹原秀雄編『新版　標準土色帖』平成 2006 年（2006）年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠した。

6．遺構番号は、調査区・遺構面・種類に関係なく、検出順にアラビア数字の通し番号を付与し、その後に遺構の種類を標記した。

7．各遺構図・遺物実測図の縮尺は、それぞれの図に縮尺を明記したスケールを付している。原則として全体図を 500 分の 1 、遺構断面図を 20 分の 1 とし、必要に応じて他の縮尺を用いた。
遺物実測図の縮尺は 4 分の 1 を基本とし、縄文土器の一部、石製品は 3 分の 1 とした。また須恵器は断面を黒く塗りつぶし、瓦器、黒色土器はアミカケをして土師器その他の土器と区別した。その他、被熱範囲をアミカケをして示している。

8．遺物実測図中の各遺物に付与した番号は、写真図版とも一致する。

目　次

序文
例言
凡例
目次

第１章　調査に至る経緯と経過…… 1

　第１節　調査に至る経緯と経過…… 1

　第２節　調査・整理の方法…… 2

第２章　位置と環境…… 5

第３章　調査成果…… 8

　第１節　層序…… 8

　第２節　検出遺構……19

第４章　まとめ……41

挿図目次

図１　調査位置図　1
図２　調査区配置図、地区割図　3
図３　周辺の遺跡分布図　6
図４　断面模式図　8
図５　１区　調査区東西断面図　10
図６　２区　調査区東西断面図　11・12
図７　３区　調査区東西断面図　14
図８　１～３区　調査区南北断面図　16
図９　２区・３区　第３ａ面　平面図　20
図 10　２区　第７－１ａ面・第７－２ａ面　平面図　22
図 11　第２ａ層～第７－２ａ層関連　出土遺物　25
図 12　１区・２区　第８ａ面　平面図、１坪境畦畔　平面図　26
図 13　１区　第９ａ面　平面図　27
図 14　第８ａ層・第９ａ層関連　出土遺物　28
図 15　１区　第 10 ａ面　平面図、１坪境畦畔付近断面図　31
図 16　２区　第 10 ａ面・第 11 －１ａ面　平面図、10 畦畔　断面図　32
図 17　２区　第 11 －２ａ面・第 11 －２ｂ面　平面図　33
図 18　９・１７・１８溝、７・13・14 溝　断面図　34
図 19　11・12・19・23・25・21 溝　断面図　36
図 20　20 溝　断面図　37
図 21　第 10 ａ層・第 11 ａ層関連　出土遺物　39
図 22　既往の調査　合成図　41

図版目次

図版１　大県郡条里遺跡　１区
1　１区　調査区断面　現地表から第８ａ層　（南西から）
2　１区　調査区断面　近世島畠と第３ａ面の畦畔　（東から）
図版２　大県郡条里遺跡　１区
1　１区　第８ａ面　東半　（東から）
2　１区　第８ａ面　１坪境畦畔　（南西から）
3　１区　第８ａ面（古）　１坪境畦畔　（北西から）
4　１区　第８ａ面　西半　（西から）
図版３　大県郡条里遺跡　１区
1　１区　第９ａ面　中央溝検出状況　（南西から）
2　１区　第９ａ面　東半　（東から）
3　１区　１坪境畦畔　土器出土状況　（北西から）
図版４　大県郡条里遺跡　１区
1　１区　第 10 ａ面　全景　（西から）
2　１区　第 10 ａ面　東側　（南西から）
3　１区　第 10 ａ面　４溝と坪境付近断面　（南から）
図版５　大県郡条里遺跡　２区
1　２区　調査区断面　現地表から第７－１ａ層　（北東から）
2　２区　調査区断面東端　第７－１ａ層～第 11 ａ層　（北西から）
3　２区　調査区断面東半　第７－１ａ層～第 11 ａ層　（北西から）
図版６　大県郡条里遺跡　２区
1　２区　東壁　近世島畠と第３ａ層　（西から）
2　２区　第３ａ面　東半　（西から）
3　２区　第３ａ面　西半　（西から）
図版７　大県郡条里遺跡　２区
1　２区　第７－１ａ面　西側　（東から）
2　２区　第７－２ａ面　東半　（東から）
3　２区　第８ａ面　西半　（西から）
図版８　大県郡条里遺跡　２区
1　２区　第８ａ面（古）　畦畔痕跡　（南東から）
2　２区　第 10 ａ面　全景　（西から）
3　２区　第 10 ａ面　10 畦畔　（南東から）
4　２区　第 10 ａ面　10 畦畔断面　（北から）
図版９　大県郡条里遺跡　２区
1　２区　第 11 －１ａ面　全景　（東から）
2　２区　７溝　断面　（北から）
3　２区　８溝　断面　（北から）
図版 10　大県郡条里遺跡　２区
1　２区　第１１－２ａ面　全景　（西から）
2　２区　第１１－２ａ面　東半　（東から）
3　２区　第１１－２ａ面　西半　（東から）
図版 11　大県郡条里遺跡　２区
1　２区　９・17・18 溝の切り合い　（北西から）
2　２区　９・17 溝断面　（北から）
3　２区　18 溝断面　（北から）
4　２区　19 溝断面　（北から）
5　２区　20 溝断面　（北西から）
図版 12　大県郡条里遺跡　２区
1　２区　14 溝断面　（北西から）
2　２区　11 溝断面　（北から）
3　２区　23 溝断面　（北西から）
4　２区　21 溝断面　（北から）
5　２区　第 11 －２ｂ面　中央　（南東から）
図版 13　山ノ井遺跡　３区
1　３区　第３ａ面　全景　（西から）
2　３区　調査区断面西半　（北東から）
3　３区　調査区断面東半　（北西から）
図版 14　出土遺物（１）
図版 15　出土遺物（２）
図版 16　出土遺物（３）
図版 17　出土遺物（４）

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と経過

本調査は一級河川恩智川法善寺多目的遊水地の建設に伴うものである。恩智川法善寺多目的遊水地は、寝屋川流域総合治水対策事業の一つとして計画され、豪雨時に恩智川の水を計画的に貯留し、河川下流域の水量を調整するものである。また、平常時には公園などとして有効活用されるものである。予定地は柏原市法善寺、八尾市神宮寺に位置しており、約 114,000 ㎡と広範に及ぶもので、本調査地を含む大県郡条里遺跡、山ノ井遺跡、神宮寺遺跡にまたがっている。そこで、平成 14 年度・15 年度の２ヵ年にわたって、大阪府教育委員会による予定地内の確認調査が行われた（註１）。確認調査では古墳時代～中世の遺構、遺物が確認されたことに加え、中世の包含層より、縄文時代や弥生時代前期の遺物が出土することから、下層にさらに古い遺構、遺物が存在することが予想された。

この成果をうけ、大阪府八尾土木事務所から「寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県郡条里遺跡発掘調査（その１）」として、公益財団法人大阪府文化財センター（以下「当センター」とする）が委託をうけ、大阪府教育委員会の指導のもと平成 23 年６月１日から平成 24 年 11 月 30 日まで発掘調査を実施した。調査では、縄文時代後期～晩期中葉の河川が検出された他、縄文時代晩期末～古代のピットや溝などの遺構や遺物が出土するなど、これまで実態の明らかでなかった中世以前の大県郡条里遺跡の性格を知る上で貴重な成果となった。また、古代末～中世にかけては条里型地割に基づく水田や畠が検出された。これらの成果は、「寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県郡条里遺跡発掘調査（その２）」として、大阪府八尾土木事務所と当

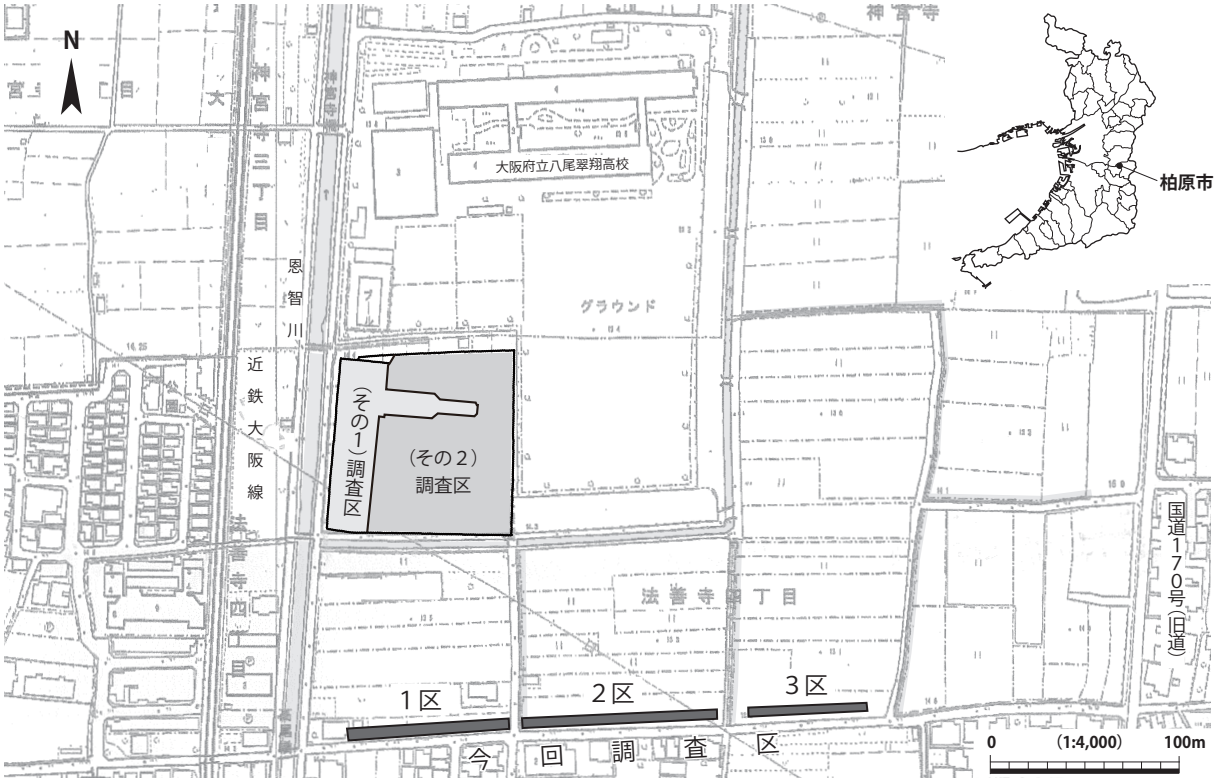


図１　調査位置図

センターとの間で平成 24 年 12 月３日付で委託契約を締結、『公益財団法人大阪府文化財センター発掘調査報告書　第 241 集　大県郡条里遺跡　寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』を平成 25 年 10 月に刊行している（註２）。

続いて平成 25 年４月 10 日から平成 26 年９月 30 日まで（その１）調査区の東隣接地を大県郡条里遺跡発掘調査（その２）として実施した。調査では縄文時代晩期の竪穴建物や土坑が検出され、その１の調査では詳細が不明であった当該期の集落が広がることが明らかとなり、続く弥生時代～古墳時代には多数の溝が検出されるなど多くの成果があった。この成果については、「寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県郡条里遺跡発掘調査（その２）遺物整理」として、大阪府八尾土木事務所と当センターとの間で平成 26 年９月１日付で委託契約を締結、『公益財団法人大阪府文化財センター発掘調査報告書　第 258 集　大県郡条里遺跡２　寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』を平成 27 年７月に刊行している（註３）。

今回の調査地は計画地の南端に位置する。遊水地の建設に伴う水路の建設に先立つもので、東西に約 275 mの範囲を横断するトレンチ状の調査地である。平成 27 年８月３日付で「寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県郡条里遺跡（その３）・山ノ井遺跡（その１）発掘調査」として、大阪府八尾土木事務所と当センターとの間で委託契約を締結、大阪府教育委員会の指導の下、同日より平成 27 年 11 月９日まで現地調査を実施した。現地調査終了後、平成 27 年 11 月 10 日から遺物整理を実施、平成 28 年４月 28 日、本書の刊行をもって一連の調査は終了した。

（註１）大阪府教育委員会　2005 『大県郡条里遺跡確認調査概要　恩智川（法善寺）多目的遊水地予定地の調査』

（註２）公益財団法人　大阪府文化財センター　2013 『大県郡条里遺跡　寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

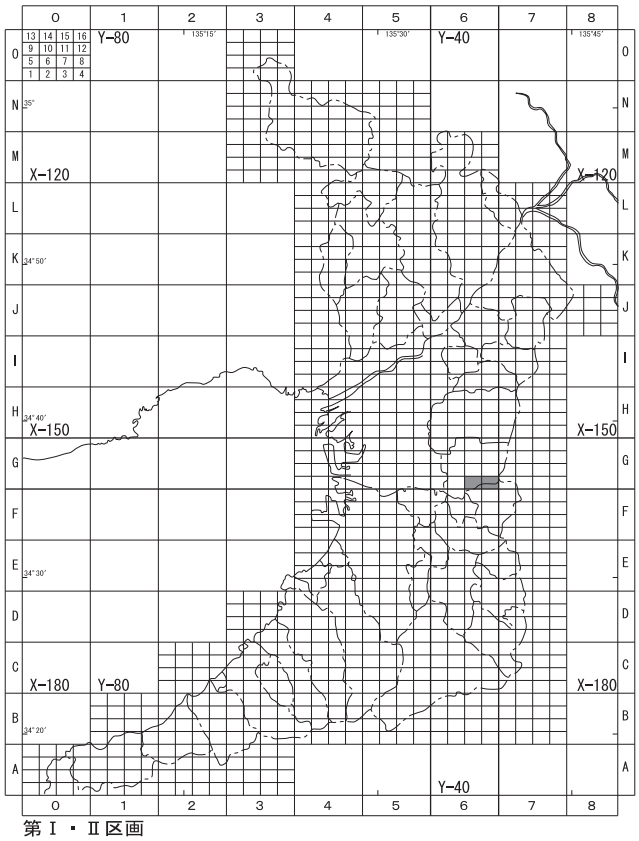
（註３）公益財団法人　大阪府文化財センター　2015 『大県郡条里遺跡２　寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

第２節　調査・整理の方法

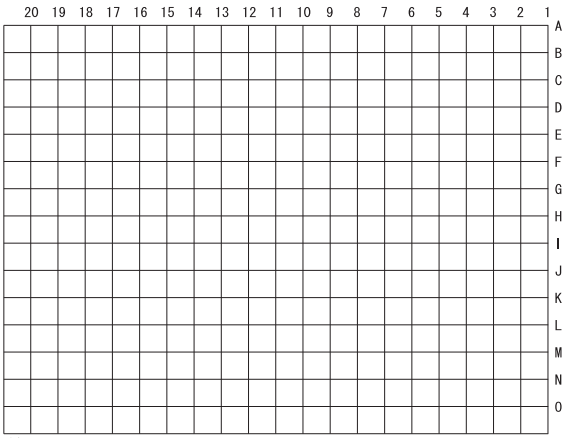
大県郡条里遺跡 15 － 1 ・山ノ井遺跡 15 － 1 は柏原市法善寺４丁目地内に所在し、遊水地計画範囲の南端に位置する。当センターでは従来、大阪府下の全調査域を統一した基準で区画できるよう、世界測地系に基づく平面直角座標系第Ⅵ系を基準とした第Ⅰ～Ⅵ区画までの６段階の地区割りを設定している。今回の調査区は、Ｇ６－３－１～３J、Ｇ６－４－20 Ｊ（第Ⅰ～Ⅲ区画）の範囲に位置する。

調査地は東西に長く、途中途切れるところはあるものの総延長 275 mの範囲にわたる。西より１区、２区、３区とした。1・２区は大県郡条里遺跡、３区は山ノ井遺跡にあたる（図２）。今回の調査は遊水地に関連した水路の建設に先立つもので、調査の掘削深度は工事影響範囲に限られる。水路は東側から西側に向かって下降するもので、３区東端で約 T.P.+12.4 mまで、１区西端で約 T.P.+11.0 mまでと 1.4 mの比高差を有する。

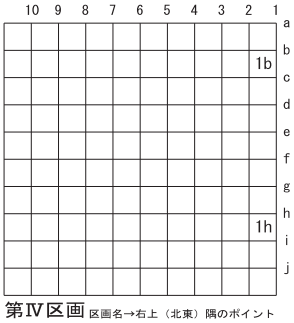
現地調査では基本的に盛土・表土及び近世相当層を重機で除去した後、人力による掘削作業を開始した。人力掘削の開始は、本調査に先立って実施された確認調査の成果に基づき計画されており、１区の人力掘削開始高は２区より 0.9 m低く予定されていた。しかし、実際の調査では予定より 0.7 m高く、



第Ⅰ・Ⅱ区画



第Ⅲ区画



第Ⅳ区画 区画名→右上（北東）隅のポイント

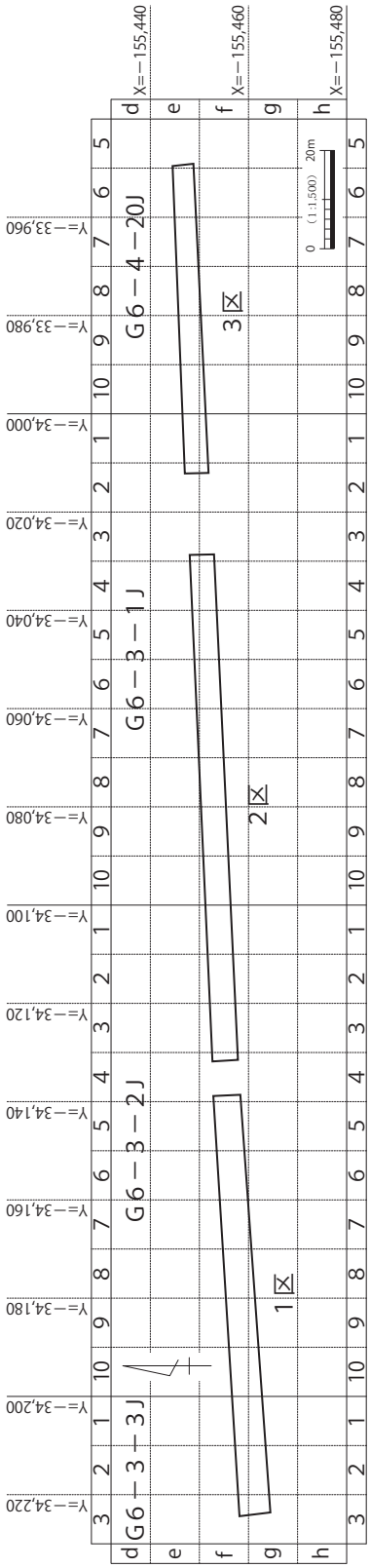


図２　調査区配置図、地区割図

中世に相当すると考えられる作土層が確認できた。そこで、大阪府教育委員会の立会を受け、上層については断面調査を実施することとなった。また、２区では調査終了高である工事影響深度付近で遺物包含層（第 11 層）を確認、下面で複数の遺構が存在する可能性が考えられた。そこで、大阪府教育委員会の立会を受け、検出した遺構については、深さのあるものについては、トレンチを入れて堆積状況を確認することとなった。

主要な遺構面は平板測量により平面図を作成した。また個別の遺構の断面図などは、10 分の１縮尺で実測を行った。

４級基準点は調査地際に３点設置し、それらをもとに調査地内に基準杭を設定した。図面作成は、それら基準杭を使用して行った。出土した遺物は層ごとに、前述の基準杭で示される 10 メートル四方を単位とした地区（第Ⅳ区画）までを用いて取り上げ、日付を付して登録番号を付与した（図２）。遺構名の記載方法は、１区から３区を通して番号を付与しており、「遺構番号（アラビア数字）－遺構種類」とした。また調査期間中、現場詰所で遺物洗浄・注記作業等の基礎的な整理作業を併行して実施した。

土層断面や遺構等の写真は、35 ㎜カメラ（白黒・カラーリバーサル）及びデジタルカメラを用いて、調査担当者が撮影した。調査区の全景写真や、特に重要な遺構写真は中形カメラ（６× ７、白黒・カラーリバーサル）にて撮影した。なお、全景写真は高所作業車から撮影した。

また、今回の調査は土留めを行わず、全てオープンで実施した。調査期間中、雨天が続いたこと、堆積層の上部が砂層であったことから、機械掘削開始直後から調査区内は常に周囲からの地下水と上層の砂層が法面から流れだすこととなった。そこで法面の崩壊を防ぐため、法面に土嚢袋を積み砂層の流入を防いだ。また、調査区北側に側溝を設けていたが、法面の勾配が急であること、掘削深度が深かったことも加わり、１区、２区において法面が地滑りを起こしてしまった。簡易の土留めを行い、これ以上の崩壊を防いだ。この結果、１区では調査区断面の記録が完成できず、これを補うために、20 m間隔で３層以下を柱状に実測した。２区では調査区南側の法面を用いて、調査区断面の記録を作成した。ただし、西側約 40 m、第８層上部以下の範囲は、現地での断面図を作成しておらず、デジタル図化を試みたが十分な復元ができなかった。そこで、調査中に細かく撮影した断面写真及び、部分的に作成した断面図を用い、各遺構平面図を作成した際に記録した高さのデーターとも照らし合わせて図６に復元、最低限の堆積状況を示すこととした。

調査は平成 27 年 11 月９日に完了した。最終調査面積は 746 ㎡である。発掘調査期間中ならびに発掘調査終了時には、適宜大阪府教育委員会の立会を受けた。

遺物登録台帳、写真台帳は、『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して作成した。現地調査で作成した各図面を精査して、トレースし挿図を作成した。遺物は洗浄・注記後、接合・石膏復元を行い、重要もしくは図化可能なものを選別し実測図を作成した。本稿で掲載した遺物のトレース図版は、その実測図をもとに作成したものである。実測対象遺物のうちの一部は、写真担当の職員が撮影し、本報告書に掲載した。最終的に遺物は、報告書掲載遺物とそれ以外とに分類して収納した。なお掲載遺物は、基本的に報告書記載の遺物番号順に収納している。

第２章　位置と環境

大県郡条里遺跡は柏原市の北端、八尾市との市境から南側の柏原市法善寺２・４丁目、平野１丁目に所在する遺跡である。山ノ井遺跡は大県郡条里遺跡の東側に隣接し、柏原市法善寺４丁目、山ノ井町に所在する遺跡である。両遺跡は大和川と石川の合流地点から約 2.5 キロ北に位置している。現在の大和川は宝永元（1704）年に付け替えられたものであるが、それ以前は現在の長瀬川から二俣に分かれて玉櫛川に沿って流れていた。旧大和川は自然堤防として遺跡の西側にその痕跡をみることができる。遺跡の東には生駒山地西麓からの扇状地が広がっている。山ノ井遺跡の東半は扇状地上に、大県郡条里遺跡、山ノ井遺跡の西半は自然堤防の西側の低地部分に立地している。大県郡条里遺跡ではこれまでの調査で、古代末から近世にかけて氾濫堆積物が頻繁にもたらされた結果、奈良時代以降、約２ｍ前後地盤が高くなっていることが分かっている。

また、調査区の西側には恩智川が北流し、恩智川周辺から旧国道 170 号にかけては方形の区画をみることができる。大県郡条里遺跡の遺跡名にあるように、古来の耕地区画である条里型地割の名残を良く留める地域といえる。

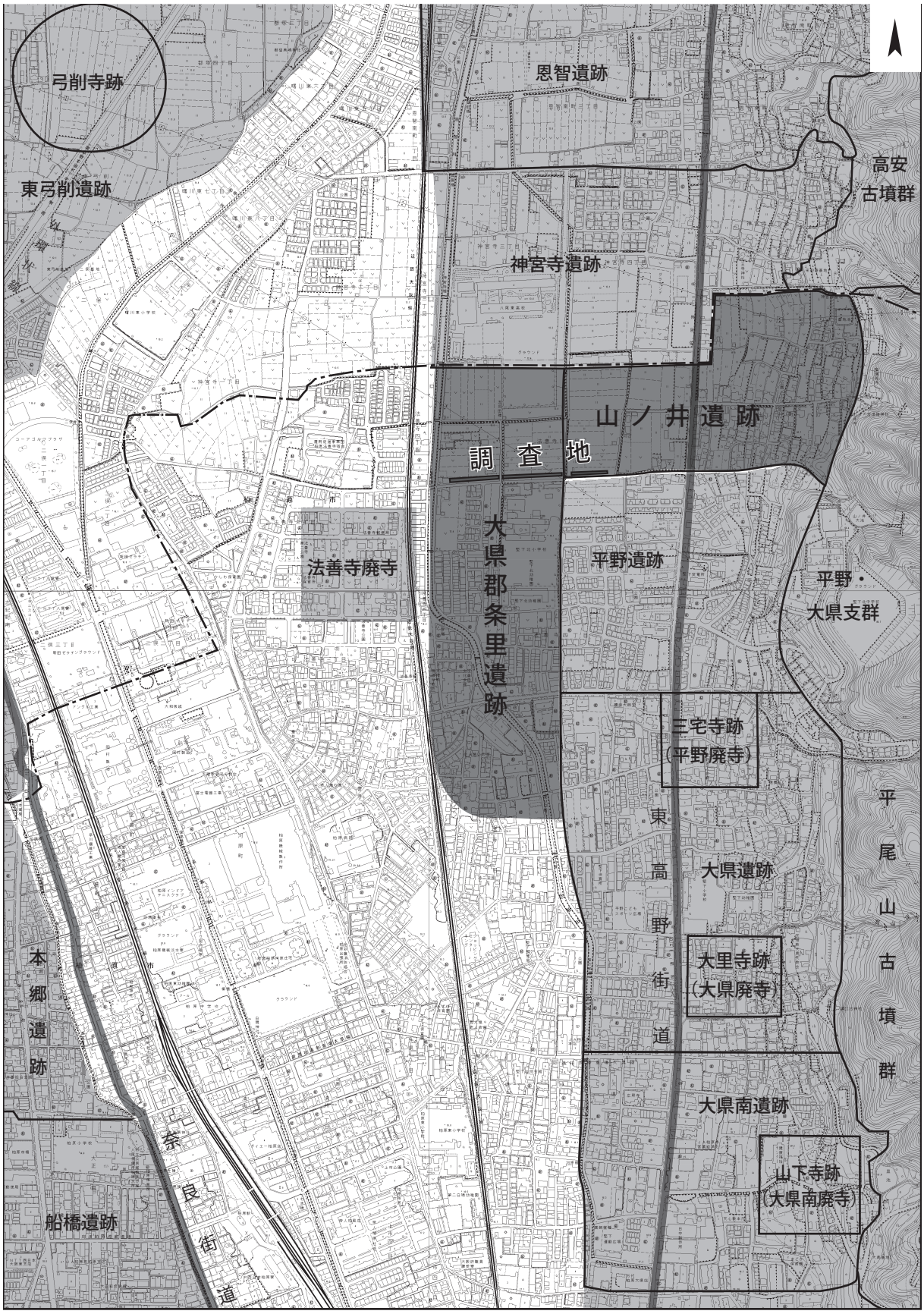
これまで、寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴って、確認調査を含め３か所の調査が行われてきた。周辺の環境については既刊の報告に詳しい。ここでは、それをもとに当遺跡の既往の調査成果について触れておきたい。

縄文時代には、当遺跡の南東に位置する柏原市大県遺跡において、縄文時代早期の押型文土器や石器、縄文時代後期の石囲いが検出されており、集落が営まれていることが分かる。集落はその後、扇状地縁辺に向かって拡大しているようで、旧国道 170 号に近接した調査では、縄文時代後期末～晩期の遺構が検出され、土器や石器が多く出土した。また、当遺跡の北東に位置する八尾市恩智遺跡では恩智川の改修工事に伴う調査で、再堆積層からではあるが、縄文時代前期～後期の遺物が出土し、「天王ノ杜」周辺の扇状地上では縄文時代晩期の集落が営まれている。

大県郡条里遺跡では縄文時代後期後葉～晩期中葉の旧大和川と考えられる河川が流れていた。河川の底面は調査深度が満たず、確認できなかったが、深さ２ｍ以上を測る。また、河川堆積層中から滋賀里Ⅰ式の深鉢とともに、煮炊きの痕跡と考えられる炭層や焼土塊の広がりが見つかった。河川の流れが安定している段階にはキャンプサイトのような場所であったことが指摘できる。縄文時代晩期中葉には埋没、放棄流路化している。縄文時代晩期末頃には土砂の供給が少なくなり、安定した環境の中、竪穴建物を伴う居住域となっていることが分かった。

弥生時代に入ると、恩智遺跡がこの地域の拠点的な集落として位置づけられる。大県遺跡では、中期の竪穴建物やサヌカイトの集積土坑、後期の竪穴建物が検出されている。大県郡条里遺跡の北側に接する八尾市神宮寺遺跡では弥生時代中期には土器棺墓が、弥生時代後期には集落が見つかっている。柏原市平野遺跡や山ノ井遺跡でも遺物の出土がみられるなど、山麓沿いに集落が点在する様相が認められる。弥生時代後期には高尾山山頂遺跡に高地性集落が現れる。

続く古墳時代には神宮寺遺跡で古墳時代初頭の河川が検出され、山ノ井遺跡でも遺物の出土がみられる。古墳時代中期～後期にかけては、大県遺跡が最盛期を迎える。隣接する柏原市大県南遺跡を含めて、鍛冶炉や鍛冶関連遺物が多く出土し、鍛冶技術者集団の集落と考えられている。同時に韓式系土器が多



0　（1：10,000）　500m

大阪府地図情報システムの地図データをもとに加筆。

図３　周辺の遺跡分布図

く出土することからも渡来人との関わりが指摘できる。遺跡背後の生駒山地西麓では巨大な群集墳である平尾山古墳群が築かれている。平野・大県支群ではかんざしやミニチュア炊飯具といった渡来系氏族との関わりの深い副葬品に加え、鉄滓など鍛冶関連遺物が出土しており、大県遺跡との関連が指摘されている。

大県郡条里遺跡では、弥生時代～古墳時代にかけての複数の溝が検出された。溝は調査区内の高所を放射状に北に向かって延びており、幾度も掘り直されている。耕地開発に関連したものであろうか。

飛鳥・奈良時代には生駒山地西麓に沿って、鳥坂寺、家原寺、知識寺、山下寺、大里寺、三宅寺と「河内六寺」と呼称される寺院が建立された。当遺跡は古代の行政区画では大県郡大里郷に属するが、大里郷域では大県南遺跡で「山下脊川」の墨書がある土師器杯が出土し、大県遺跡では「大里寺」と書かれた墨書土器が井戸から出土するなど、山下寺（大県南廃寺）、大里寺（大県廃寺）の所在が明らかになりつつある。また、近接した調査では同時期の遺構、遺物が多くみられ、寺院の造営に関連した集落があるものと考えられる。三宅寺（平野廃寺）は、詳細は不明ながら平野に所在するとされる。大県郡条里遺跡でも墨書土器や製塩土器、漆付着土器、硯、軒丸瓦が出土するなど、その関連が注目される。

中世には、大県南遺跡で土坑墓が検出されており、山下寺跡寺域の調査では 14 世紀の掘立柱建物や土坑等が検出され、寺院の廃絶後に集落が営まれている。神宮寺遺跡でも鎌倉時代の生産域が確認された他、室町時代の井戸やピットが、山ノ井遺跡では整地層の可能性がある土層が確認されるなど、集落の一端が分かりつつある。

先述のように調査地周辺は条里型地割を現地表に良く留める地域であるが、大県郡の条里坪付けの詳細などは明らかではない。これまでの調査では、平安時代には条里型水田が施行されていたことが明らかになっており、今後、どこまで遡れるかが大きな課題と言える。

現在の大和川が付け替えられたことは先述のとおりだが、17 世紀中頃～後半には土砂の流入で、大和川の河床の上昇が深刻化していた。河床は周囲の水田より高くなり、増水時の被害は甚大となり、更に天井川化するという悪循環であったようである。当時の状況を良く示すものとして、中家文書「堤切所之覚・同付箋図（仮称）」がある（中九兵衛　2007「古文書からみた大和川付け替え運動」『大和川付け替え 300 年－その歴史と意義を考える－』大和川水系ミュージアムネットワーク編）。洪水被害の惨状を述べ、改善工事の実施を要望する訴状で、添付された絵図には延宝二年の寅年洪水（1674 年）以降の堤切れ所や改善策が付箋等で表示されている。これによれば、延宝二年の洪水で玉櫛川の河口にあった法善寺二重堤が流出し、その結果、玉櫛川の河口が広がり毎年のように多くの切れ所が発生していることが分かる。二重堤の流出後、本支流が逆転して、玉櫛川に濁流が流れ込み、玉櫛川とその下流域に洪水が多発したことが窺われる。洪水の被害は当調査区周辺にも及んだものと考えられる。これまでの調査でも近世には多くの土砂がもたらされたことが明らかとなっているが、前代の地割を踏襲しながら洪水砂を利用して島畠が作られていることが確認されている。

第３章　調査成果

第１節　層序（図４～８、図版１・５・13）

今回の調査地は遊水地に関連する水路の建設工事に伴うもので、途中途切れる部分があるものの、東西に総延長約 275 mの範囲に及ぶ。南北の幅は狭いものの、３町を横断するトレンチ状の調査とも言える。土層の堆積状況を把握することが、周辺の土地利用、地形の形成過程を知る上での手掛かりとなり、今回の調査の最大の課題と考えられた。しかしながら、掘削深度は工事影響範囲に限られ、東から西に向かって深度が深くなっていることから、３区東端と１区西端では掘削深度に約 1.4 mの比高差が生じている。そのため、鍵になる層が連続して確認できず、各層の対応を考えることが十分できなかった部分は否めない。また、１区、２区は掘削深度が深かったこと、上層が砂層であったこと、雨天が続いたことから、法面からの地下水の流出が著しかった。そのため、法面上層の砂層が流れだし、観察用の調査区周囲の壁面が大きく崩れてしまった。また、法面の勾配がきつく、下層の粘質土付近で地滑りを起こしてしまった。そのため特に１区では土層の観察、記録が十分に行えなかった。ここでは、観察、記録できた事項に関してできるだけ詳細に示し、今後の周辺の調査に備えたいと考える。

当遺跡は複数の氾濫堆積物の供給によって埋没しており、氾濫堆積物をはじめとする水成層とその上部の土壌化層をセットとして層序を捉えるよう努めた。各層は水成層上部の作土層や古土壌層といった土壌化層をａ層とし、母材である水成層をｂ層と表すことを基本としている。

盛土及び近世相当層までを重機による掘削の対象とした。ただし、１区に関しては、第２章第２節で記述のとおり、第３層～第６層は重機による掘削となり、その範囲に関しては断面調査となった。

第０層　現代の耕作土層及び整地層である。

第１層　作土層及びその母材である氾濫堆積層からなる。第１ａ層はにぶい黄色の中粗砂の作土層である。第１ｂ層は厚い部分では層厚 0.9 mを測る氾濫堆積層である。第１ｂ層のうち、上層は灰白～淡黄色、褐色の細礫～粗砂を主体とし、下層は灰黄色の粘質シルトとなる。調査区周辺は近世には島畠が

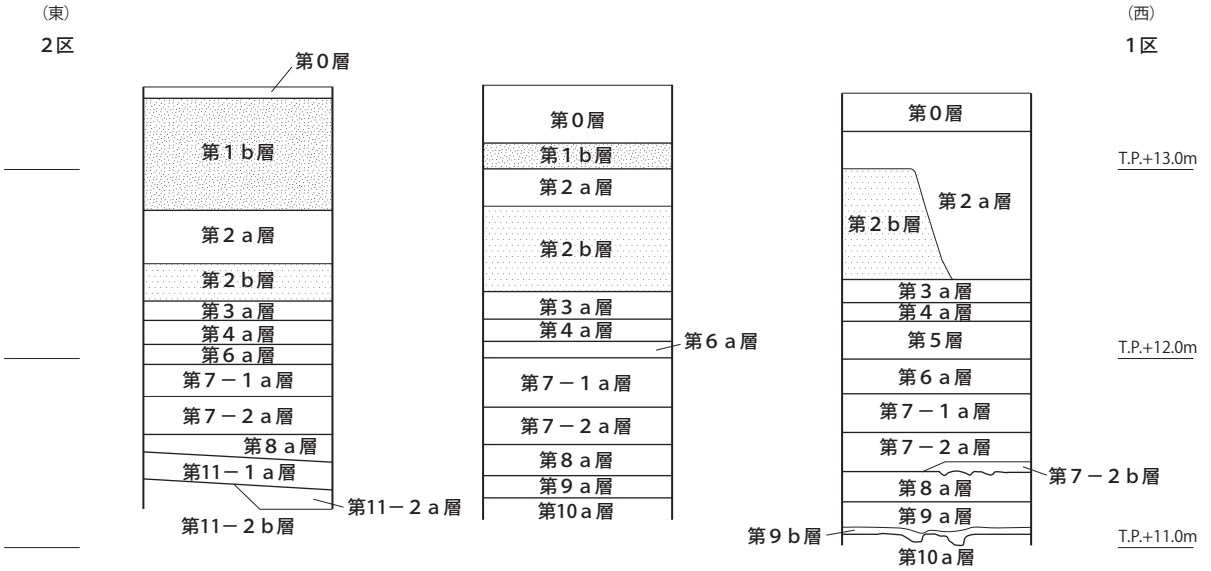


図４　断面模式図

作られていたことがこれまでの調査で明らかであるが、第２ａ面で水田であった低い部分は第１ｂ層が厚く、特に下層のシルト質土が厚く堆積している。水田部分は第１ｂ層によって埋没し、ほぼ平坦な耕作地となっていたと考えられる。

第２層　作土層及びその母材である氾濫堆積層からなる。第３ａ面を覆う氾濫堆積層を境に上層を第２層とした。第２層は基本的に機械掘削の対象層であるが、断面観察、及び機械掘削終了時の状況から第２層段階の土地利用について、若干述べることとする。

第２層に関連する各面は水田及び島畠として利用されていたことが分かる。各調査区の断面では島畠と水田の状況が良好に確認できたので、これをもとに各土層について記述を進めたい。

第２層は複数層に細分することができる。先述のｂ層は黄橙～明黄褐色、浅黄色の細砂を主体とし、第１ｂ層に比して細粒である。層厚は厚い部分で 0.7 mを測る。この分厚い部分が島畠の芯となっている。１区の南北断面（図８、図版１－２）では、南半でこのｂ層が厚く、島畠となっている。２区、３区の東西断面（図６・７）では、西側でこのｂ層が厚く、島畠であったことが分かる。これに対する作土層は３区では図７の土層９、９´にあたり、１区では図８の土層６～８がこれにあたる。２区では図６の土層９にあたる。１区、２区では細粒で砂質が高く、第３ａ層や第４ａ層の作土と類似した土質である。次に２区、３区の東西断面をみると、この島畠は拡張していると考えられ、３区図７の土層５、２区図６の土層８（及び９の上部）は盛土である可能性が高い。拡張された島畠の作土が第１ｂ層直下の作土層と考えられる。水田部分は下層を掘り下げている状況が窺え、これを盛って島畠を拡張したものと考えられる。

以上の状況を整理すると、第２ａ層段階には、第２ｂ層を芯とした島畠がつくられ、その後、水田面を掘り下げて、島畠を拡張していることが分かった。

当調査地周辺は現状では、東西方向に長い地割となっている。１区から３区の南北断面をみるといずれも中央付近で堆積状況が異なっており、第２層に関連する遺構面でも東西方向に長い地割であったことが分かる。また、２区、３区の東西断面では約 50 m付近で高低差が生じており、半折型であったと考えられる。

第１層～第２層には陶磁器類が含まれており、近世～近代の耕作土と考えられる。３区の２層から出土した土玉を図 11 －１、図版 17 に掲載した。

第３ａ層　第２ｂ層を掘削して確認した中世作土層である。（その１）（その２）調査では自然堆積層に覆われ、全域で良好に水田、畠を検出した層に対応する。

１区では第２ｂ層で覆われており、調査区全域で確認することができる。ほぼ水平に堆積しており、層厚は 0.15 mを測る。緑灰色のシルト混細砂で粘質シルトブロックを含む。機械掘削中に坪内を半分に区画する南北方向の畦畔を確認した他、調査区西壁で東西方向の畦畔を確認している。２区では東半は第２層の水田によって攪乱され、第３ａ層がほとんど遺存しなかった。灰色の細砂混粘質シルトである。３区では東３分の２では掘削限界のため第３層に達しなかった。西側もその北半は第２層で攪乱され第３層は遺存しなかった。青灰色の細砂混粘質シルトである。なお、３区では第３層までで調査が終了している。

第４ａ層　第３ａ層を掘削して確認した中世作土層で、ほぼ水平に堆積する。第３ａ層に比して砂質が高い、オリーブ灰色、青灰色のシルト混細砂である。層厚 0.1 ～ 0.15 mを測る。第３ａ層との層境では細砂の踏込が確認できる。

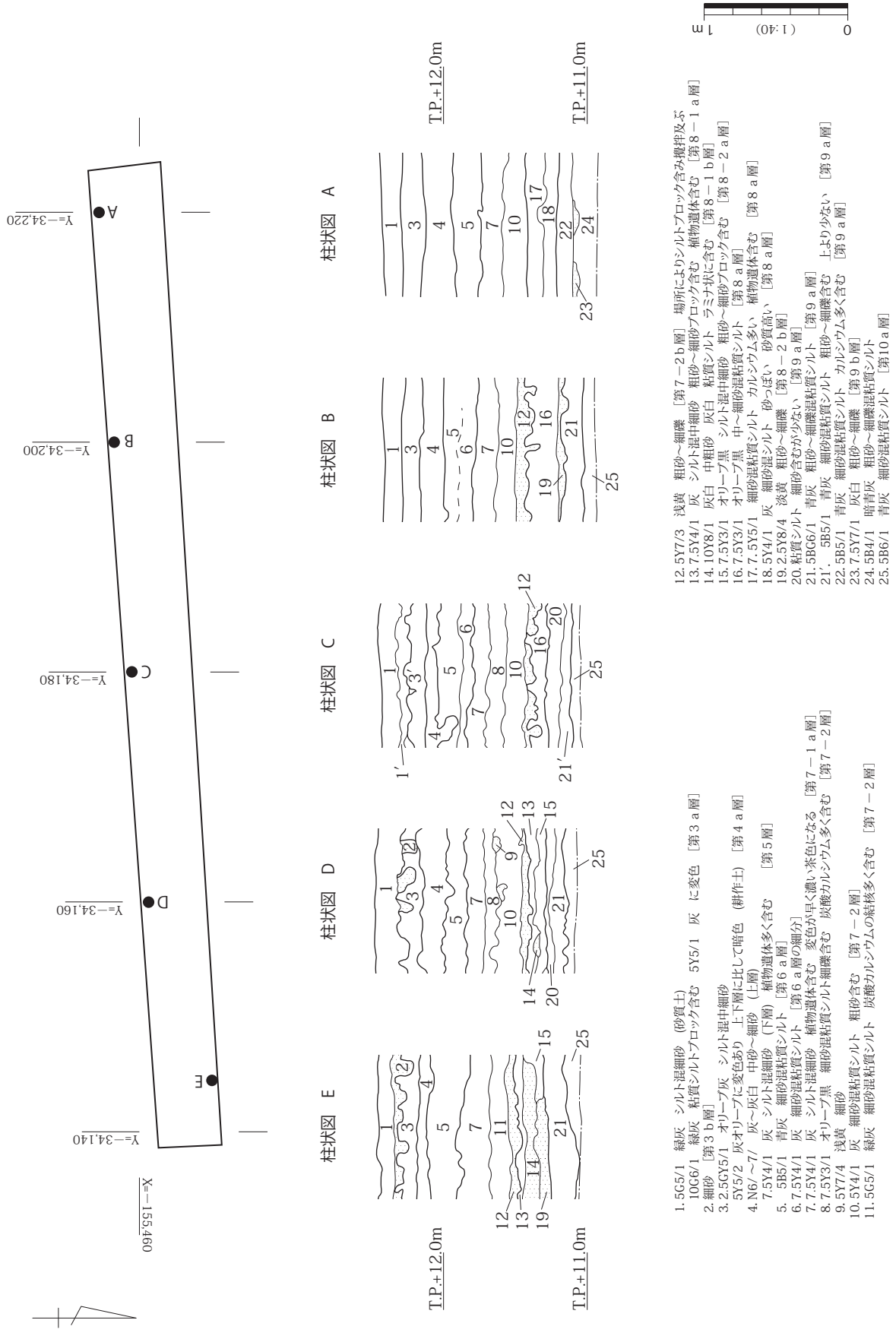
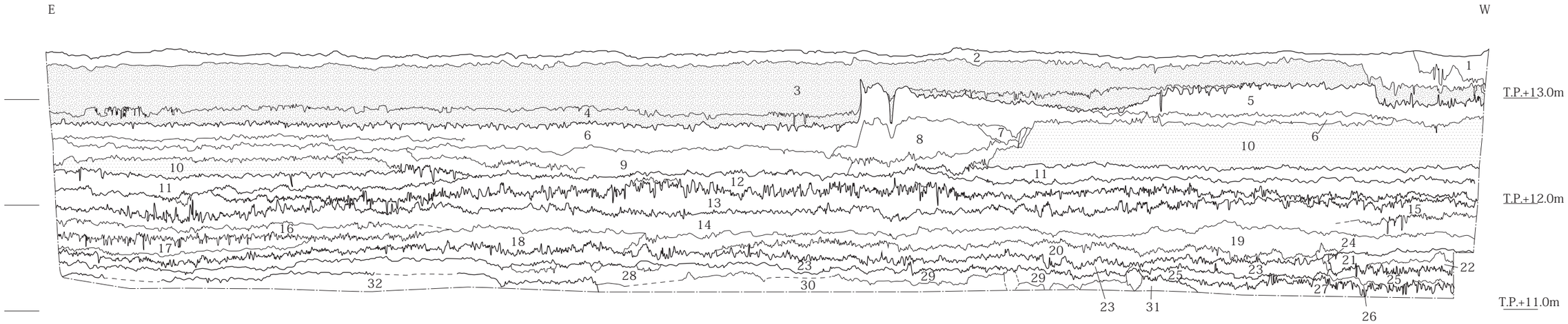


図5　1区　調査区東西断面図



1．盛土
2．7.5Y2/1　黒　細礫混中粗砂　［旧耕土］
3．5Y8/2～8/3　灰白～淡黄　細礫～粗砂主　［第１ｂ層］
4．2.5Y6/2　灰黄　粘質シルト　鉄分筋状に沈着　［第１ｂ層］
5．2.5Y6/3　にぶい黄　シルト混中細砂　［第２ａ層］
6．2.5Y5/3　黄褐　シルト混中細砂　上部、溝状に細砂　［第２ａ層］
7．5B5/1　青灰　細砂混粘質シルト
8．5B4/1　暗青灰　細砂混粘質シルト　細砂ブロック含む　［第２層盛土］
9．5PB4/1　暗青灰　シルト混中細砂　砂質高い　［第２ａ層］
10．10YR8/6～6/6　黄橙～明黄褐　細砂主　灰色粘質シルト～細砂がラミナ状にみられる　［第２ｂ層］
11．7.5Y5/1　灰　細砂混粘質シルト　［第３ａ層］
12．5B5/1　青灰　シルト混細砂　上層より砂質高い［第４ａ層］
13．5B6/1　青灰　細砂混粘質シルト　［第６ａ層］　12と１３の間に細砂点在する
14．2.5GY3/1　暗オリーブ灰　細砂混粘質シルト　茶色に変色　［第７－１ａ層］
15．2.5GY3/1　暗オリーブ灰　シルト混細礫～粗砂　西端のみ　14との境不明瞭　［第７－１ａ層］
16．5Y4/2　灰オリーブ　シルト混中粗砂　細礫含む　粗砂多く含む　下部に黄色粗砂残る　茶色に変色　東端のみ　14との境不明瞭　［第７－２ａ層］
17．5Y4/1　灰　細砂混シルト　やや粘性あり　細砂多く含む　［第７－２ａ層］
18．7.5Y4/1　灰　細砂混シルト　粘性あり　上より砂多く含む　植物片多い　［第７－２ａ層］
19．7.5Y3/2　オリーブ黒　細砂混シルト　炭酸カルシウム多く含む　特に上部に沈着　上部に細砂の踏込み　［第７－２ａ層］
20．5Y4/1　灰　細砂混粘質シルト［第７－２ａ層］の細分層
21．7.5Y3/1　オリーブ黒　シルト混中粗砂　上部黄色細砂の踏込み　下部白色中細砂の踏込み　［第８ａ層］
22．5Y3/1　オリーブ黒　シルト混中細砂　21より砂質高い　［第８ａ層］
23．5B5/1　青灰　細砂混粘質シルト　［第８ａ層］
24．5Y3/1　オリーブ黒　シルト混細砂［第８ａ層］
25．5G6/1　緑灰　粗砂～細礫混粘質シルト［第９ａ層］
26．7.5Y7/1　灰白　粗砂～細礫［第９ｂ層］　踏込み状に残る程度
27．5G4/1　暗緑灰　細砂混粘質シルト　細礫含む　９ａ層より少ない　粘る　［第10ａ層］
28．5PB4/1　暗青灰　細砂混シルト　炭含む　第11ｂ層小ブロック含む　［第11ａ層］
29．5P4/1　暗紫灰　細砂混粘質シルト　炭含む　炭含む　［第11－１ａ層］
30．5PB4/1　暗青灰　細砂混粘質シルト［第11－２ａ層］
31．５G6/1　緑灰　細砂混粘質シルト［第11－２ａ層］の細分
32．7.5GY7/1　明緑灰　シルト混細砂　［第11－２ｂ層］

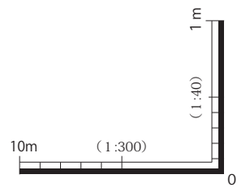


図６　２区　調査区東西断面図

第５層　第４ａ層を掘削して確認した層である。上部は灰～灰白色の細～中砂で、下部は植物遺体を多く含む灰色のシルト混細砂からなる。当初、自然堆積層と考えられたが、下部のシルト混細砂上面で踏み込みが確認でき、この上面が一時期地表面であった可能性が考えられる。１区では調査区全体で確認できるが、東に向かって薄くなり、２区では細砂の薄層として部分的に確認できるのみであった。ここでは十分に検討できなかったため、ａ、ｂ層の区別をせず、第５層とする。

第６ａ層　第５層を掘削して確認した中世の作土層である。調査区全域でみられる。青灰～灰色の細砂混粘質シルトで、粘性が高い。層厚は 0.15 ～ 0.2 ｍ前後を測る。第６ａ層の上下は乱れが著しく、火焔状を呈する部分も多い。踏込みというよりは、地震による地形の変形と考えられる。

第３ａ層～第６ａ層は遺物の出土が非常に希薄で、時期の特定は困難であるが、中世後期頃の時期が与えられる。

第７ａ層　第６ａ層を掘削して検出した中世前期の作土層である。第６ａ層までは１区、２区を通して変化の少ない均質な土層であったが、第７ａ層は層相が地点によって異なっており、土層の連続を追うのが困難であった。ｂ層の遺存状況も地点により異なり、土壌層の連続となっている事も層序の把握を困難にしている。第６ａ層までは広範囲にｂ層がもたらされ、それを攪拌した土壌は類似した作土と認識できたが、第７層以下は、比較的小規模な範囲に氾濫堆積層がもたらされたため、地点による土層の違いが大きくなったものと考えられる。特に２区の第７・８層は調査区西端、東端で砂層を薄く挟んで層が細分できる傾向があった。

最初に調査を実施した１区では第７ａ層より下層に広範囲に分布するｂ層（第７－２ｂ層）が確認でき、これより上層を第７層とした。第７ａ層は植物遺体を多く含み、土色の変色が著しく、茶色に変色する特徴を有する。１区、２区ともに茶色に変色する土壌の連続として認識できた土層である。調査では第７－１ａ層、第７－２ａ層に大分した。１区では第７－１ａ層は灰色のシルト混細砂、それより下層の細砂混粘質シルトを第７－２ａ層とした。中央付近では第７－２ａ層は２層に細分され、その間にわずかに砂層がみられた。第７－２ａ層は上部に炭酸カルシウムの結核が沈着する特徴を有する。第７―２ｂ層は浅黄色の粗砂～細礫である。西端では遺存しない。

２区では第７－１ａ層は暗オリーブ灰色細砂混粘質シルト層を基本とするが、西端は２層に分かれ、西端は上部にシルト混細礫～細砂層がみられるが、途中で基本とした細砂混粘質シルトと層境が不明瞭となる。第７－２ａ層は１区と同様、上部に炭酸カルシウムの結核が多くみられる層である。オリーブ黒色の細砂混シルト層および灰色の粘性のある細砂混シルト層を基本とする。東側では上部に灰オリーブ色のシルト混中粗砂層、灰色のやや粘質の高い細砂混シルト層がみられ、複数層に細分できる。また、第７－１ａ層と第７－２ａ層の間にはわずかに細砂が踏み込み状にみられた。１区では広範囲にみられた第７－２ｂ層は２区ではほとんど遺存しない。

第７層は上層までと比して遺物が多く出土した。第７－１ａ層が 13 世紀～ 14 世紀前半、第７－２ａ層が 11 世紀末～ 12 世紀の時期が与えられる。

第８ａ層　第７層を除去して確認した中世初頭頃の作土層である。層厚 0.15 ｍ前後を測る。第８ａ層は部分的に細分でき、調査では便宜的に第８ａ層に枝番を付けて呼称した。部分的な土層のため、１区、２区の対応は十分に検討できておらず、ここでは第８ａ層の細分層として特に枝番号を付していない。１区では前述のとおり、大部分が第７―２ｂ層に覆われ遺存状況は良好である。東半は灰白色の中粗砂を挟んで２層に細分でき、上層は灰色のシルト混中細砂、下層はオリーブ黒のシルト混中細砂であ

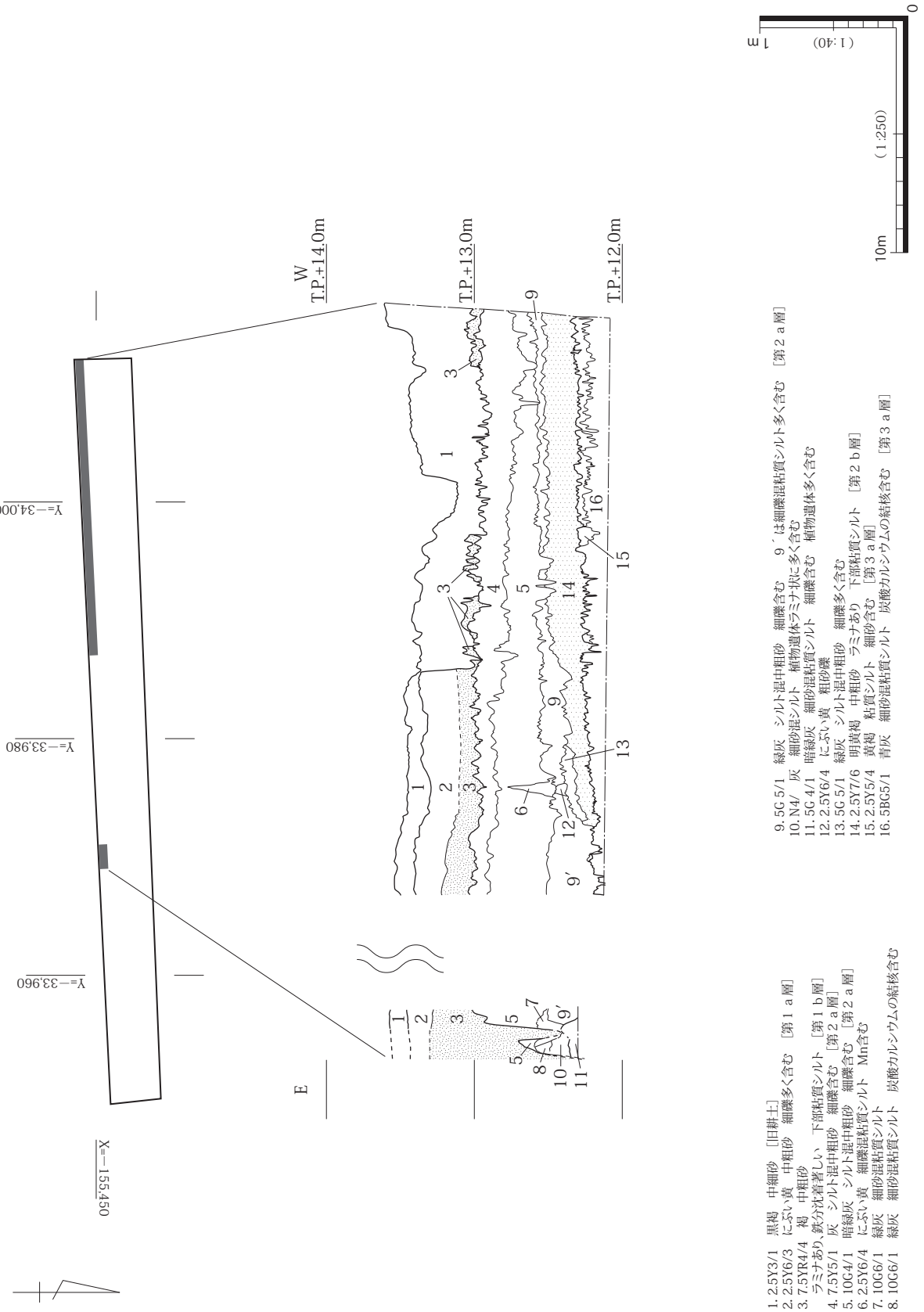


図7　3区　調査区東西断面図

る。西半はオリーブ黒色の中細砂混粘質シルトで、西端は灰色の細砂混粘質シルトとなる。全体に西側に向かって細粒となっている。第８ｂ層は淡黄色の粗砂～細礫で部分的にみられるのみであった。

２区では青灰色の細砂混粘質シルト層を基本とする。西端はオリーブ黒色の砂質土で細砂を挟んで２層に細分でき、１区の東端に類似した土層となる。第８ｂ層は遺存しない。

１区の第８ａ層は遺物の出土が上層に比して少ないが、２区の東側では多くの遺物が出土した。古代の遺物の他、縄文時代～古墳時代の遺物も含まれる。東側では第８ａ層・９ａ層が同一層となり、下層の遺物が多く混入しているものと考えられる。１区の第９ａ面で検出した１坪境畦畔の上部で出土した瓦器椀は、第８ａ層内の遺物と考えられる。第７－２ａ層で出土する瓦器椀の特徴と類似しており、大きな時期差はないものと考えられる。11 世紀後半を中心とする時期が与えられる。

第９ａ層　第８ｂ層を除去して確認した古代の作土層である。層厚 0.1 ～ 0.15 ｍを測る。青灰～暗青灰色の粗砂礫を多く含む粘質シルト層を基本とする。１区では調査区中央付近は第８ｂ層がなく、基本とした粗砂礫を多く含む粘質シルト層の上部にシルト質土がみられる。西端では粘質シルト層と粗砂礫を含む粘質シルトの層境に粗砂礫層がわずかにみられた。調査では粘質シルト層も第９ａ層として掘削したが、西端の状況からは粗砂礫層（図５　土層 23）は第８－２ｂ層に対応する層と考え、粘質シルト層（図５　土層 20、22）は第８ａ層の細分層とする方が妥当ではなかったかと考えている。

１区では全域で第９ａ層に対応する土層が確認できたが、２区では調査区西側で確認できるのみで、東側は第８ａ層に攪乱されて遺存しない。緑灰色の粗砂礫を多く含む粘質シルトである。第９ｂ層は灰白色の粗砂～細礫であるが、第９ａ層に攪拌されほとんど遺存しない。

１区の第９ａ層からは細片ではあるが多くの遺物が出土した。古代の遺物の他、古墳時代後期～飛鳥時代の遺物も目立って出土した。前述の２区東側の第８ａ層と類似した遺物の出土状況といえる。第９ａ層は砂礫層をよく攪拌しており耕作土と考えているが、耕作土にしては遺物量が多い点が問題といえる。第９ｂ層の粗砂礫層が周辺の包含層を削った結果、あるいは耕作に伴って下層の包含層を攪拌したために遺物が巻き上がった状況が推測できる。出土遺物の時期幅が大きく、年代を特定しにくいが、平安時代を中心にした年代を考えたい。

第 10 ａ層　第９ａ層を除去して検出した土層で、青灰色、暗緑灰色の細砂混粘質シルト層である。非常に粘質が高い層である。１区では第 10 ａ層中でほぼ工事影響深度に達した。２区では調査区西側でわずかに確認できるのみで、東側は上層に攪乱され遺存しない。調査した範囲が限られるが、古墳時代後期～飛鳥時代を中心とした遺物が出土している。

第 11 ａ層　第 11 ａ層は上層までと比して暗色の土壌化層である。0.1 ｍ～ 0.2 ｍを測る。青灰色、暗紫灰色の細砂混粘質シルト層で、黒色の帯として認識できる。２区では中央付近から西に向かって２層に細分できたため、第 11 －１ａ層、第 11 －２ａ層とした。第 11 －１ａ層は第 11 －２ａ層に比して炭を多く含み暗色を示す。第 11 －１ａ層、第 11 －２ａ層上面は東側が高く、西に向かって下降している。そのため２区西側、および１区では第 10 ａ層中で工事影響深度に達し、第 11 －１ａ層は確認できなかった。第 11 －２ｂ層は緑灰色のシルト混細砂である。２区東半で確認した。生痕が著しい。

第 11 ａ層は上層に比して遺物の出土は少なかった。わずかに出土した遺物から第 11 －１ａ層は縄文時代晩期～奈良時代、第 11 －２ａ層が縄文時代晩期頃を中心とした時期を与えたい。

２区西側で第 11 －１ａ層は落ち込み、第 10 ａ層がその上部に堆積していると考えたが、工事影響

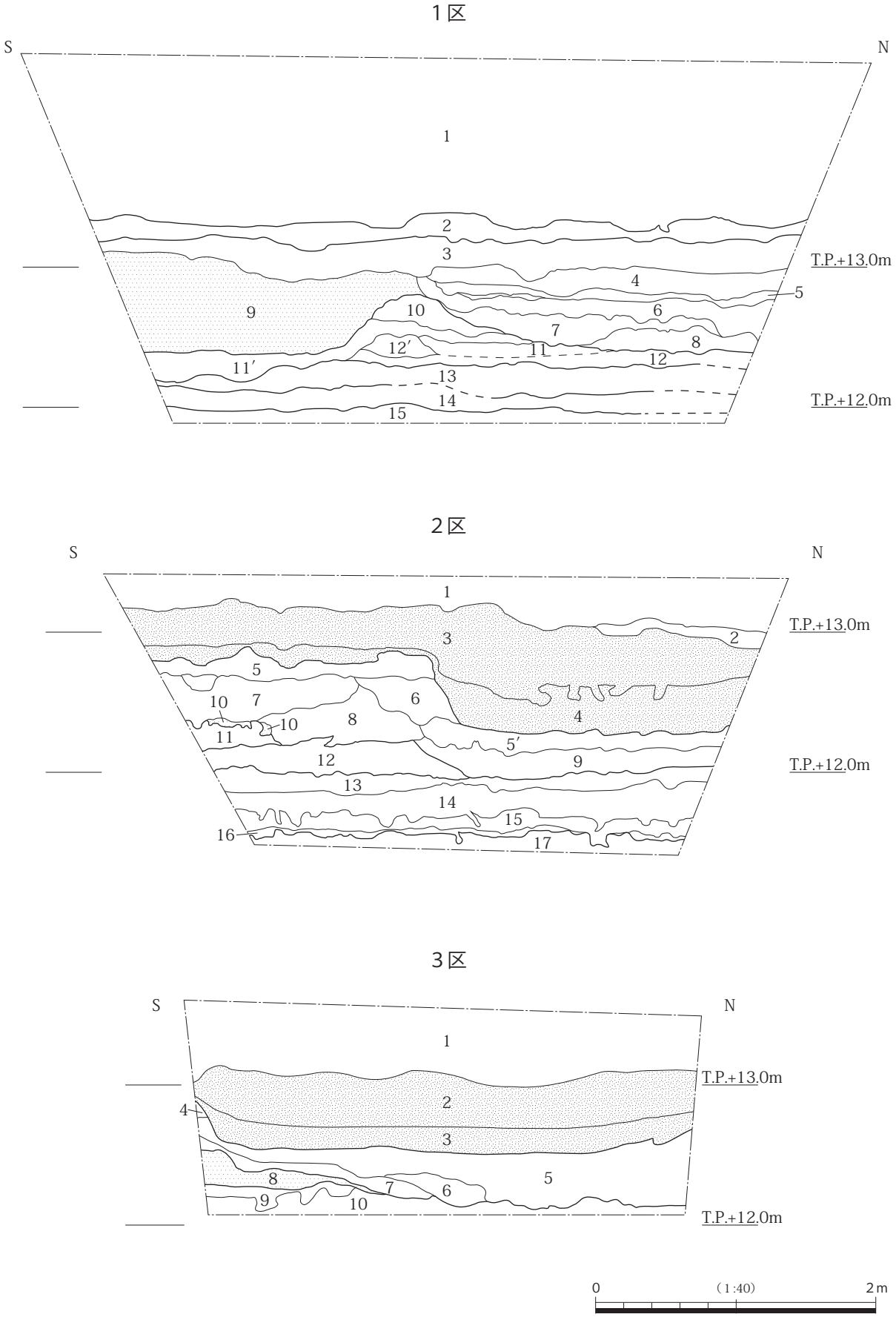


図８　１～３区　調査区南北断面図

１区　西壁

1. 10YR4/3　にぶい黄褐　中粗砂　細礫含む　［盛土］
2. 5Y3/1　オリーブ黒　細礫混中粗砂　［旧耕土］
3. 10YR6/3　にぶい黄橙　粗砂混中細砂　Fe沈着　［第２ａ層］
4. 10YR5/3　にぶい黄褐　シルト混中細砂　Mn、Fe沈着　［第２ａ層］
5. 7.5YR5/6　明褐　細砂混シルト　Fe沈着著しい　［第２ａ層］
6. 10YR7/2　にぶい黄褐　細砂混粘質シルト　Fe粒子状に沈着　［第２ａ層］
7. 10YR5/3　にぶい黄褐　中細砂　緑灰シルトブロック含む　［第２ａ層］
8. 10YR5/3　にぶい黄褐　中細砂　灰色細砂混粘質シルトブロック混じる　［第２ａ層］
9. 5Y7/4　浅黄　細砂　ラミナあり　［第２ｂ層］　上部Ｍｎ沈着
10. 10G6/1　緑灰　細砂混シルトと細砂のブロック混合土　［盛土］
11. 5G5/1　緑灰　シルト混細砂　緑灰粘質シルトブロック含む　［第３ａ層］
11´. 10YR5/3　にぶい黄褐　粘質シルト混中細砂　変色　［第３ａ層］
12. 5G4/1　暗緑灰　シルト混中細砂　11に比してやや暗色　［第３ａ層］　12´はシルトブロック多い
13. 2.5GY5/1　オリーブ灰　シルト混中細砂　粘質シルトブロック含む　［第４ａ層］
14. N6/～7/　灰～灰白　中～細砂　下部は灰色シルト混細砂　植物遺体多く含む　［第５層］
15. 5B5/1　青灰　細砂混粘質シルト　［第６ａ層］

２区東壁

1. 7.5Y2/1　黒　細礫混中粗砂　［旧耕土］
2. 7.5Y7/1　灰白　細砂混シルト
3. 5Y8/2～8/3　灰白～淡黄　粗砂～細礫主　［第１ｂ層］
4. 2.5Y6/2　灰黄　粘質シルト　［第１ｂ層］
5. 2.5Y5/3　黄褐　シルト混中細砂　［第２ａ層］
5´. 2.5Y5/3　黄褐　シルト混中細砂　5に類似する　［第２ａ層］
6. ５より色うすいが類似した層　［第２ａ層］
7. 5B4/1　暗青灰　細砂混粘質シルトと細砂のブロック土　［第２ａ層盛土］　褐色に変色
8. ７と類似したブロック土　ブロック大きい　［第２ａ層盛土］
9. 2.5Y5/3　黄褐細砂混粘質シルト　12の土色変色の可能性もあり
10. 10YR8/6～6/6　黄橙～明黄褐　細砂主　［第２ｂ層］
11. 7.5Y5/1　灰　細砂混粘質シルト　［第３ａ層］
12. 5B6/1　青灰　細砂混粘質シルト　［第６ａ層］
13. 2.5GY3/1　暗オリーブ灰　シルト混粘質シルト　茶～黒色に変色　［第７－１ａ層］
14. 5Y4/2　灰オリーブ　シルト混中粗砂　細礫含む　粗砂多く含む　［第７－２ａ層］
15. 5Y4/1　灰　細砂混シルト　やや粘性あり　植物片、細砂多い　［第７－２ａ層］
16. 7.5Y4/1　灰　細砂混シルト　粘性あり　植物片多く含む　15より砂多く含む　［第７－２ａ層］
17. 5B5/1　青灰　細砂混粘質シルト　［第８ａ層］

３区西壁

1. 2.5Y3/1　黒褐　中細砂　［旧耕土］
2. 7.5YR4/4　褐　中粗砂　ラミナあり、鉄分沈着著しい　下部粘質シルト　［第１ｂ層］
3. 2.5Y6/2　灰黄　粘質シルト
4. 7.5YR5/1　灰　シルト混中粗砂　細礫含む　［第２ａ層］
5. 10G4/1　暗緑灰　シルト混中粗砂　細礫含む　［第２ａ層］
6. 5BG4/1　暗青灰　シルト混粗砂　細礫含む
7. 5G 5/1　緑灰　シルト混中粗砂　細礫含む　［第２ａ層］
8. 2.5Y7/6　明黄褐　中粗砂　ラミナあり　下部明黄褐色の粘質シルト　［第２ｂ層］
9. 2.5Y7/4　黄褐　粘質シルト　細砂含む　［第３ａ層］
10. 5BG5/1　青灰　細砂混粘質シルト　炭酸カルシウムの結核含む　［第３ａ層］

深度に達し、第 10 a 層と第 11 － 1 a 層の関係は十分検討できなかった。第 10 a 層は古墳時代後期～飛鳥時代を中心にする遺物が出土していることから、第 11 － 1 a 層が西側の低い部分では細分され、第 10 a 層がその細分層にあたる可能性が考えられる。ただし、第 10 a 層の掘削範囲は限られており、第９ a 層同様、下層遺物の混入といった状況も否定できない。

調査区は縄文時代晩期頃には２区東側が高くなり、西に向かって下降する地形であったことが分かる。縄文時代晩期末～奈良時代頃までは土砂の供給が少なく、西側の低い部分では遺構面の更新もあるようだが、東側の高い部分ではほとんど遺構面が更新されていない。奈良時代以降は土砂の供給が一定みられるようだが、未だ起伏が残る。中世初頭には調査区全域で耕作土の更新が認められるが、土層の状況からは一度に広範囲に氾濫堆積層がもたらされたというよりは、小規模な氾濫によって、部分的に土壌が更新されているような状況が推測できる。西側と東側の高低差も徐々に解消され、中世後期には調査区全域に広範に及ぶ氾濫堆積層によって土壌が更新され、平坦な耕作地となり、前代までとは逆に西側の標高が高くなる部分もみられた。

次に過去の調査区との層序対について触れておきたい。（その２）調査で（その１）調査との層序の対応関係がまとめられているので、ここでは（その２）調査を基本に述べる。

まず、第２ b 層は周辺で広範囲に確認できる氾濫堆積物であり、これに覆われた第３ a 層は（その２）調査の第１層に相当する。次に暗色の土壌層として認識できた第 11 a 層は（その２）調査の第８層に相当すると考えられる。第 11 － 2 a 層は第８層の細分層と考えるが、出土遺物からは第９層に対応する可能性も考えられる。第３ a 層と第 11 a 層間は土層の特徴などが異なっており、先述のように第７ a 層以下は、部分的に細分される層もありその対応が難しい。第４ a 層～６ a 層は（その２）調査の第２層に、第７－１ a 層は（その２）調査の第３層、第４層に、第７－２ a 層、第８ a 層は（その２）調査の（第４層）、第５層に、第９ a 層は（その２）調査の第６層、第７層に概ね相当するものと考えたい。

第２節　検出遺構

今回の調査地は３町にまたがる東西に細長いトレンチ状を呈している。西から１区、２区、３区として調査を行った。まず、全体の概要を述べ、各遺構面の詳細を述べることとする。なお、遺構面の呼称は第Ｘ層上面を第Ｘ面とした。また、ｂ層が遺存しない場合、上層（第Ｙ層）中から掘り込まれた遺構も第Ｘ面で検出されることになる。上層に関連すると判断できる遺構に関しては第Ｙ層下面遺構という表現をしている。

調査地周辺は条里型地割が現地表に遺存している地域である。第１節で述べたように第２層の状況からは、現地表と同様東西方向に長い地割であったことが分かる。また、東西に長い区画内を更に二分する半折型の地割であった可能性が高い。

第３ａ層～第８ａ層は中世の、第９ａ層は古代の耕作土と考えられる。比較的細粒の土砂が頻繁に供給されたことによって、耕作面は更新され、近世までに厚い所で 1.3 m程度地表面が上昇している。複数の耕作面を検出したが、幅の狭い調査区のため耕地区画の復元には至らなかった。また、いわゆるｂ層が残る部分は少なく、土壌層が連続しており、畦畔などの検出は困難であった。しかし、１区第７－２ａ面～第９ａ面では南北方向の坪境畦畔を検出し、第７－１ａ面で坪境が東に移動していることが指摘できた。また、２区、３区の第３ａ面、２区の第７－１ａ面では東西方向の溝を、１区の第９ａ面でも東西方向の溝を検出しており、東西方向の地割を基本としていた可能性が高い。なお、３区は西半で第３ａ面を検出したが、東半は工事影響深度が浅く、第１ｂ層内で調査を終了している。

第 10 ａ層は２区西端から１区で確認することができた。これより以東では、第８ａ層を除去すると第 11 ａ層が露出する。第 10 ａ面では南北方向の畦畔や坪境に関連した溝を検出したが、いずれも第９ａ層の下面遺構と判断され、今回の調査では最古の条里に関連した遺構面と考えられる。

第 11 ａ層は暗色の土壌化層で上層とは様相が異なる。第 11 ａ層は２区東半では T.P.+11.4 m付近で比較的平坦に堆積しているが、西半では西に向かって下降するようである。２区中央より東側が高く、西に向かって下降している地形が想定される。第 11 ａ層は２区西側から１区では工事影響深度より下層に位置するものと考えられ、確認できなかった。２区東半の高所を中心に同層の上面、下面で溝などの遺構を検出した。これらの溝は古代から縄文時代晩期のものと考えられる。

なお、出土した遺物は第３ａ層から第７ａ層までは耕作土であることから、細片のものが多く、出土数も全体に少ない。特に第６ａ層までは遺物の出土が非常に少なかった。また、各層は 0.1 m前後と薄い耕作土の連続であることから、下層の巻き上げは当然ながら、上層からの踏み込みなども掘り分けることは困難であり、上層の遺物が混入している可能性は否定できない。第８ａ層以下は細片ではあるものの、比較的多くの遺物が出土した。しかし、その時期幅は広く、下層の遺物が混入している可能性が十分考えられる。こうした前提ではあるが、掲載した出土遺物を中心に各土層、遺構面の帰属年代の把握に努めた。また、墨書土器や製塩土器、漆付着土器、軒丸瓦など寺院や官衙の存在を示唆する遺物の出土が特筆できる。

第３ａ面（図９、写真図版１－２・６・13－１）

第２ｂ層除去して検出した遺構面である。過去の調査ではｂ層で覆われた遺構面であるため、良好に畠の畝および畦畔が検出されている遺構面である。しかしながら、今回の調査では第１章第２節で述べたように、１区は遺構面としての調査を実施していない。２区では第２層の各面で水田であった東半の

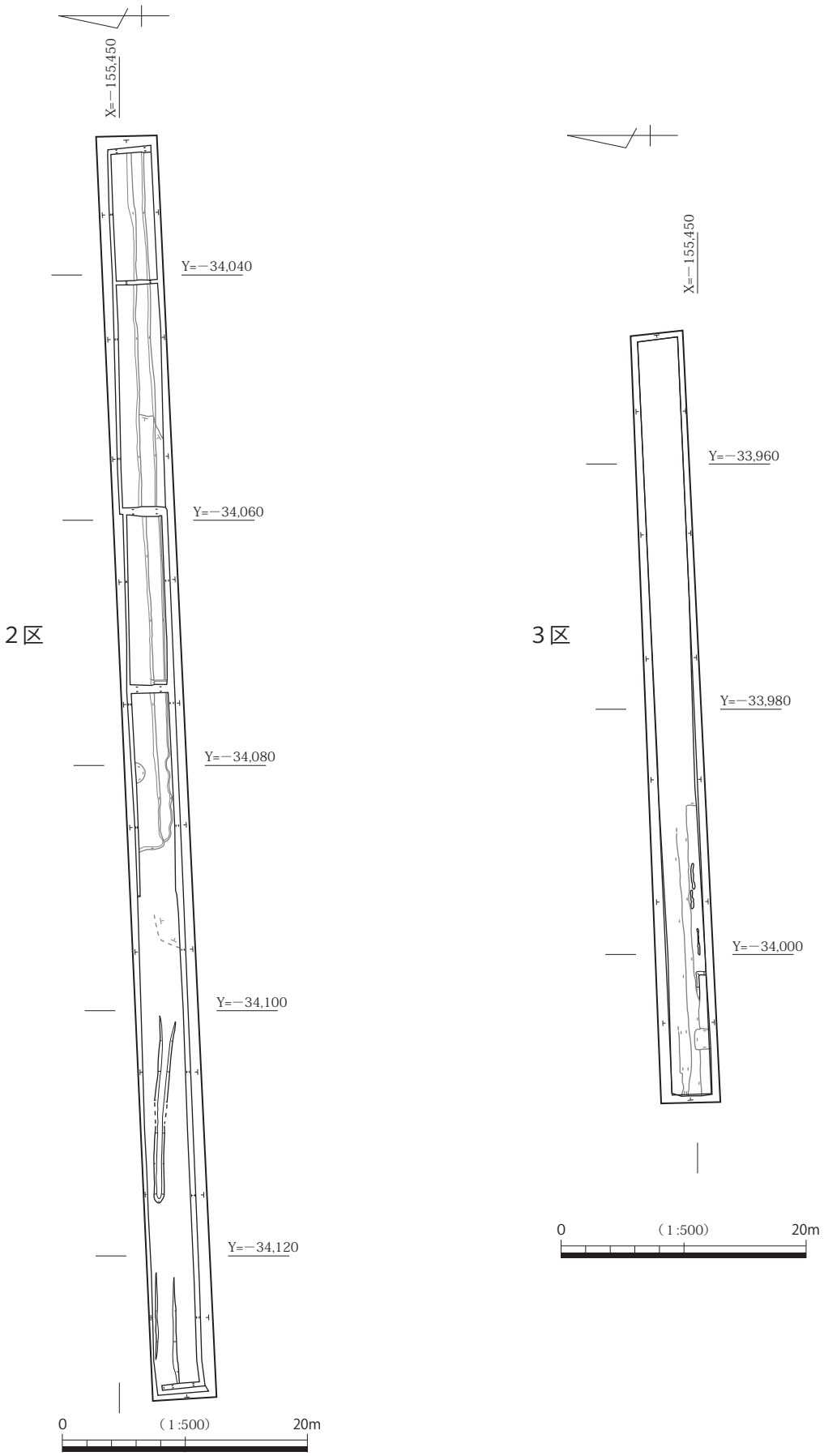


図９　２区・３区　第３ａ面　平面図

北側は大部分が２層で削平され、遺構面の遺存状況が悪い。また３区では東半は第３ａ層に達せず、西半も北側は２区東半と同様、上層で攪乱され遺構面の遺存状況は全体的に不良であった。遺構面の高さは１区では概ねT.P.+12.4 ～ 12.5 m、２区では概ねT.P.+12.3 ～ 12.4 m前後、３区でT.P.+12.2 ～ 12.3 m前後となり、各トレンチではほぼ水平に堆積しているが、全体でみると東側が低くなる。

１区では大部分が第２ｂ層で覆われており、機械掘削途中で良好に遺存する南北方向の畦畔を１条検出した。坪内を南北にほぼ二分する位置にあたる（西端より約25 m東側）。また、調査区の西壁をみると、調査区内を南北に分かつ高まりがみられる。東西方向の畦畔であろう（図８　図版１－２）。２区では調査区西半で、東西方向の溝状の窪みを２条検出した（図９　図版６－３）。幅１m～ 1.5 mと広く、深さ５㎝前後と浅い。第２ｂ層の下部のシルト層で埋没している。溝の延長上が第２層段階の耕地段差にあたること、溝を挟んで北側の遺構面が数センチではあるが高いことから、同様に耕地段差を示すものか、あるいは畠の畝溝の可能性が考えられる。３区では東西方向の幅0.2 m程度の狭い溝を数条検出した（図９　図版13－１）。耕作に関わる溝であろう。また、西から10 mの地点で５㎝以下の高低差がみられ、東側が低くなる。

第３ａ面はこれらの溝の方向から東西方向の区画が想定される。

第４ａ面～第６ａ面は平面的な調査は行っていない。第４ａ面の高さは１区でT.P.+12.3 m前後、２区でT.P.+12.2 m前後を測る。第３ａ層と同様、各トレンチ内をほぼ水平に堆積しており、全体でみると東側が低くなる。第３層と第４層の間には明瞭なｂ層は残らないが、足跡状の踏込みが多く残る。断面観察では畦畔状の高まりは確認できなかった。第５層は基本層序でも述べたとおり砂層とシルト質土がセットになった自然堆積層と考えていた。しかし、下部層のシルト混細砂上面で踏込みが確認でき、一時地表面となっていたと考えられたことから、第４ｂ層とはせずに第５層としている。１区西端では約0.2 mと厚いが東に向かって薄くなり、２区ではほとんど層としては認識できない。踏み込み状に砂層が残る程度である。第５層で覆われた第６ａ面の高さは１区ではT.P.+12.0 ～ 12.1 m、２区ではT.P.+12.1 mを測り、ほぼ水平であるが、全体的にみると西側が低くなる。１区西端から２区東端まで上層に比して白色で粘質のある類似した土層として認識できる。上面は凹凸が著しく、火焔状になって第５層と混じりあう部分もみられ、地震による地層の変形の可能性が指摘できる。

第６ａ層出土遺物（図11　図版14）

２・３は第６ａ層から出土した。２は土師器皿である。口縁部はヨコナデ、端部は更に強くヨコナデし、断面三角形状を呈する。３は瓦器皿である。口縁部はヨコナデ、体部外面には指オサエが残る。

第３ａ層から第６ａ層までは遺物の出土が少なく、図化できる遺物は少なかったが中世後期の時期が与えられる。

第７－１ａ面（図10　図版７－１）

第６ａ層を掘削して検出した同層下面の遺構面である。遺構面の高さは１区ではT.P.+11.8 ～ 11.9 mを、２区ではT.P.+11.9 ～ 12.0 mを測り、各トレンチ内をほぼ水平に堆積しており、全体でみると西側が低くなる。

２区で平面的な調査を行った。２区西端で東西方向に平行して延びる２条の溝を検出した。溝は幅0.3 m～ 0.5 mを測り、深さは５㎝以下と浅い。溝間は約1.6 mを測る。溝埋土は上層に類似している。Y = － 34,110 m付近より東側では溝の延長を確認できなかった。溝を検出した範囲は第７－１ａ層が砂礫質である範囲に一致している。畠の畝溝と考えられる。

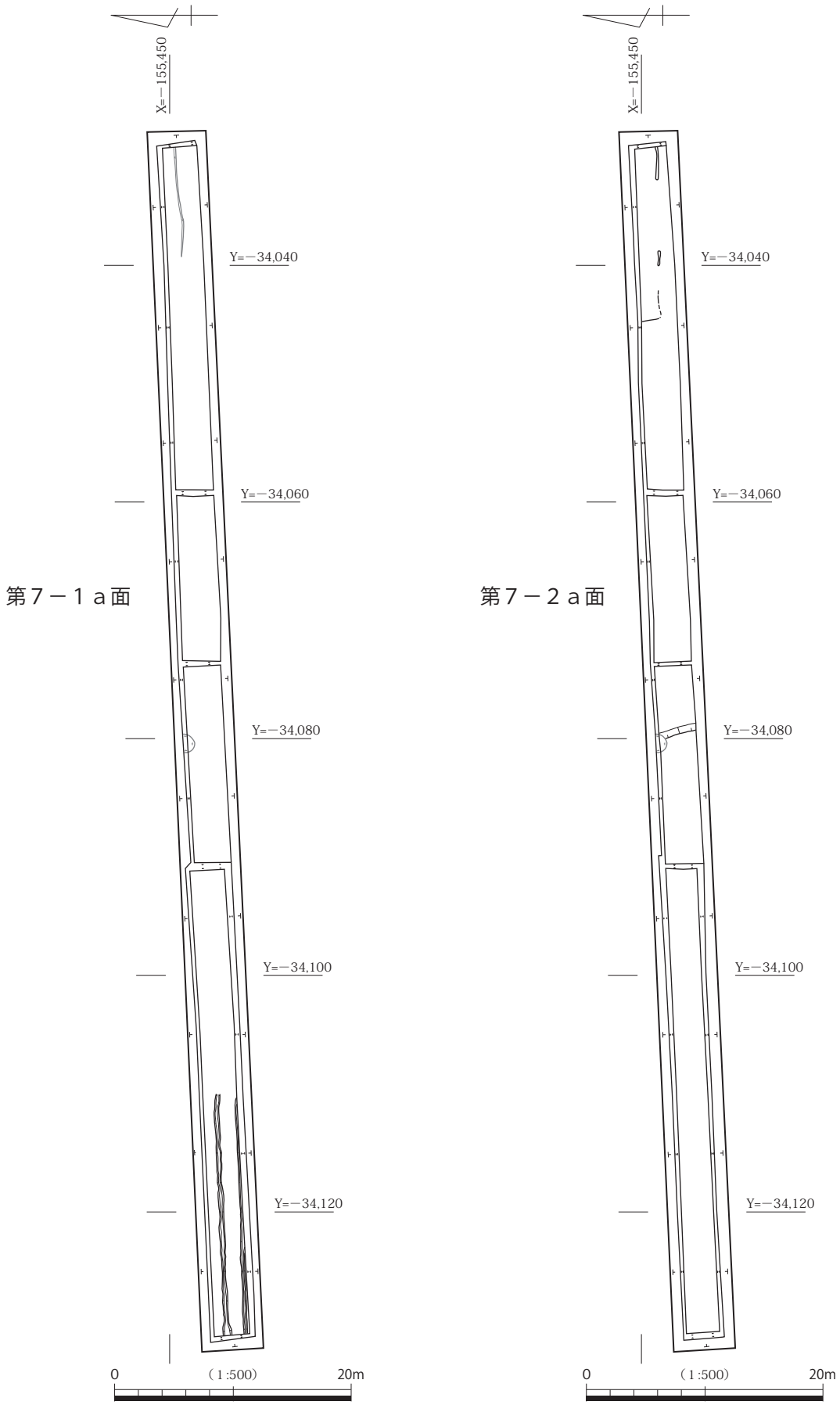


図 10　2区　第7－1ａ面・第7－2ａ面　平面図

第７－１ａ層の出土遺物より 14 世紀を中心とした時期が与えられる。

第７－２ａ面（図 10　図版７－２）

第７－１ａ層を除去して検出した遺構面である。最初に調査を実施した１区では平面的な調査は実施しなかったが、第８ａ面で検出した１坪境畦畔が第７－２ａ面で踏襲されていることが分かり、出土遺物が比較的多く、第７－１ａ層とは明確な時期差がみられたことから、２区では平面的な調査を実施した。遺構面の高さは１区では T.P.+11.6 ～ 11.7 m、２区で T.P.+11.7 ～ 11.8 mを測る。全体では西側が低くなる。

先述のとおり、１区の第８ａ面で検出した１坪境畦畔は第７－２ａ面でも踏襲されている。図 15 の１坪境付近の断面図をみると、第７－１ａ層（土層 10）上面は水平であるが、第７－２ａ層（土層 12）上面は東端が高く盛り上がっていることが分かる。土層 10 は下面も水平であることから、第７－１ａ面では、この位置に畦畔は存在しないと判断できる。土層 12 はその下面も東側が盛り上がっており、更に第７－１ａ層との間に粗砂を多く含む土層 11 が存在することから、この盛り上がりは第７－２ａ層上面の畦畔と判断した。

１坪境畦畔から２区の東端まで、ほぼ 110 mを測り、２区東端で坪境に関連する遺構の検出を期待したが、検出できなかった。調査区より東側に位置するものと考えられる。その他畦畔は検出できなかったが、２区中央付近でわずかに耕地段差を確認した。第７－１ａ層とは明瞭なｂ層は介在しないが、調査区東側は、足跡状に砂が多くみられる範囲があり、南北方向に溝状に分布する部分もあった。この範囲は第７－２ａ層がシルト混中粗砂層となる部分にほぼ一致する。耕地段差を反映したものと考えられる。

第７－２ａ層の出土遺物より 12 世紀を中心とした時期が与えられる。

第７ａ層関連出土遺物（図 11、図版 14）

図 11 －４～ 20 は第７－１ａ層関連出土遺物である。第７－１ａ層からは土師器、瓦器が主体的に出土した。４～ 13 は土師器皿である。４～８は口径７～８㎝前後と小さいものである。４は平らな底部から直線的に口縁部が延びるものである。５～７は口縁部をヨコナデし、端部は丸味をもつ。体部外面は未調整、７は底部の凹凸が目立つ。８は口縁部をヨコナデ、端部は更に強くヨコナデし、断面三角形状を呈する。体部外面は未調整である。９は７と似るが口径がやや大きい。10 は口径 11.1 ㎝と大きく、それに対し器高が 1.4 ㎝と扁平な印象を与える。平らな底部から直線的に口縁部が延びるもので、端部をさらに強くヨコナデする。11 は口縁部のヨコナデが強く、体部との境に段が生じる。12・13 は器高が高いもので、12 は口縁部をヨコナデ、口縁端部はつまみ上げるようにヨコナデする。13 は口縁部が外反する。

14 は瓦器皿である。15 ～ 19 は瓦器椀である。15・16 は体部内面に疎らな圏線状のヘラミガキを施す。体部外面には指オサエ痕跡が残る。色調は灰白色系を呈する。18・19 は断面半円形状を呈する低い高台が残る。見込みには 18 は渦巻き状のヘラミガキが、19 は遺存状況が悪いが平行線状の暗文が施される。17 は内面のヘラミガキが 15・16 よりは密で、体部外面は指オサエが残り、ヘラミガキが疎らに施される。15・16 より古い特徴を有する。20 は瓦質土器のすり鉢である。内面、および口縁部に煤が付着しており、二次焼成を受けている。

出土遺物の特徴より第７－１ａ層は 13 世紀～ 14 世紀前半の時期が与えられる。その他、図化していないが、２区からはスラグが１点出土している。

21 ～ 24 は第７－１ａ層から出土した木製品である。21 は長さ 3.9 ㎝と短いが、栓と考えられる。側面を面取りして多角形に形を整える。22 は板材である。11.4 ㎝ ×7.35 ㎝、厚さ 1.2 ㎝を測る。図面上の裏面はやや丸みを持っている。表面は広範囲にわたって炭化し、傷が見られた。23 は板材である。厚さ 0.65 ㎝と薄い。容器の側板と考えられる。釘穴が側縁に一か所みられた。24 は幅 3.3 ㎝の加工のある角材である。先端は山形に加工され、片面に２条の平行する直線が刻まれている。

図 11 － 25 ～ 35・37 は第７－２ａ層関連出土遺物である。36 は第７－２ｂ層から出土した。38 は側溝内第７層以下からの出土であるが、ここに掲載した。第７－２ａ層からは土師器、瓦器が主体的に出土している。25 は白磁碗である。口縁部は小さい断面三角形を呈する。26 ～ 30 は土師器皿である。26・27 は直径 8.5 ㎝前後の皿で口縁部はヨコナデ、端部は内傾気味となる。28 はいわゆるての字口縁の皿である。29 は直径 13 ㎝、30 は直径 15 ㎝に復元でき、口縁部はヨコナデ、端部は更にナデて面をもち、断面三角形状を呈する。

31 ～ 37 は瓦器椀である。31 は体部内面にヘラミガキを施す。体部外面には指オサエ、わずかにヘラミガキがみられる。32 は見込みの暗文が格子状を呈するものである。高台は細く断面四角形を呈する。33 ～ 37 は底部片である。いずれも比較的高く、丸味のある断面三角形の高台がハの字状に外に張り出す。器壁はいずれも厚い。見込みにはヘラミガキを密に施す。37 の見込みには × をヘラで記す。38 は黒色土器Ｂ類椀である。底面は平らで、見込みにはヘラミガキを密に施す。見込みにはヘラ書きが認められ、37 と同様、× と考えられる。

31・32 の瓦器椀など 12 世紀の特徴を有する瓦器椀を含むが、33 ～ 37 など 11 世紀末頃の瓦器椀が一定量含まれており、11 世紀末～ 12 世紀の年代を与えたい。なお、25・31・32 はいずれも２区の東端砂礫層からの出土で、基本とした第７－２ａ層より上位の層にあたる。第７－２ａ層とした中で、年代差が存在することを示すものと考えられる。

第８ａ面（図 12、図版２、７－３）

第７－２ａ層および第７－２ｂ層を除去して検出した遺構面である。遺構面の高さは１区では東側が T.P.+11.5 ｍ前後、西側は T.P.+11.4 ｍ前後を測る。２区では T.P.+11.5 ～ 11.6 ｍを測る。

１区では大部分が砂の薄層に覆われた遺構面で足跡が多く残る（図版２－１）。ただし、１区西側（図 12 のＣの範囲）では砂層はみられない（図版２－４）。図 12 のＡ、Ｂは砂が帯状に抜けており、畦畔、あるいは耕地段差を表すものと考えられる。またＢとＣの間は上層の攪拌が及び、砂層がブロック状になっていた。これは上面の耕地段差を反映するものであろう。遺構面からは牛骨と考えられる骨片が出土した。調査区東端で南北方向の１坪境畦畔を検出した。畦畔の東肩は検出できず、現状で幅 0.5 ｍを測り、調査区断面から幅は少なくとも１ｍ以上に復元できる。高さは T.P.+11.7 ｍを測り、水田面との比高差は 0.2 ｍを測る。この畦畔は検出した位置やその規模から坪境を表すものと考えられる。１坪境畦畔の西肩および裾部で杭列を検出した。２杭列は１坪境畦畔の西肩に平行するもので、４本確認した。３杭列は１坪境畦畔の裾部に平行するもので、調査区断面を含め６本確認した。３杭列は第９ａ面で検出したが、調査区断面では第８ａ面までその上部が達していた。いずれの杭列もその打設時期を決定するのは難しいが、第８ａ面に帰属する可能性が高いと判断し、図 12 に合成して表した。２杭列と３杭列は杭の形状に違いが認められる。２杭列は細い丸太状を呈するが、３杭列はこれとは異なり、幅２㎝程度の断面三角形や四角形の角材に加工されている。杭の形状の異なることから、あるいは打設時期が異なっている可能性も考えられる。

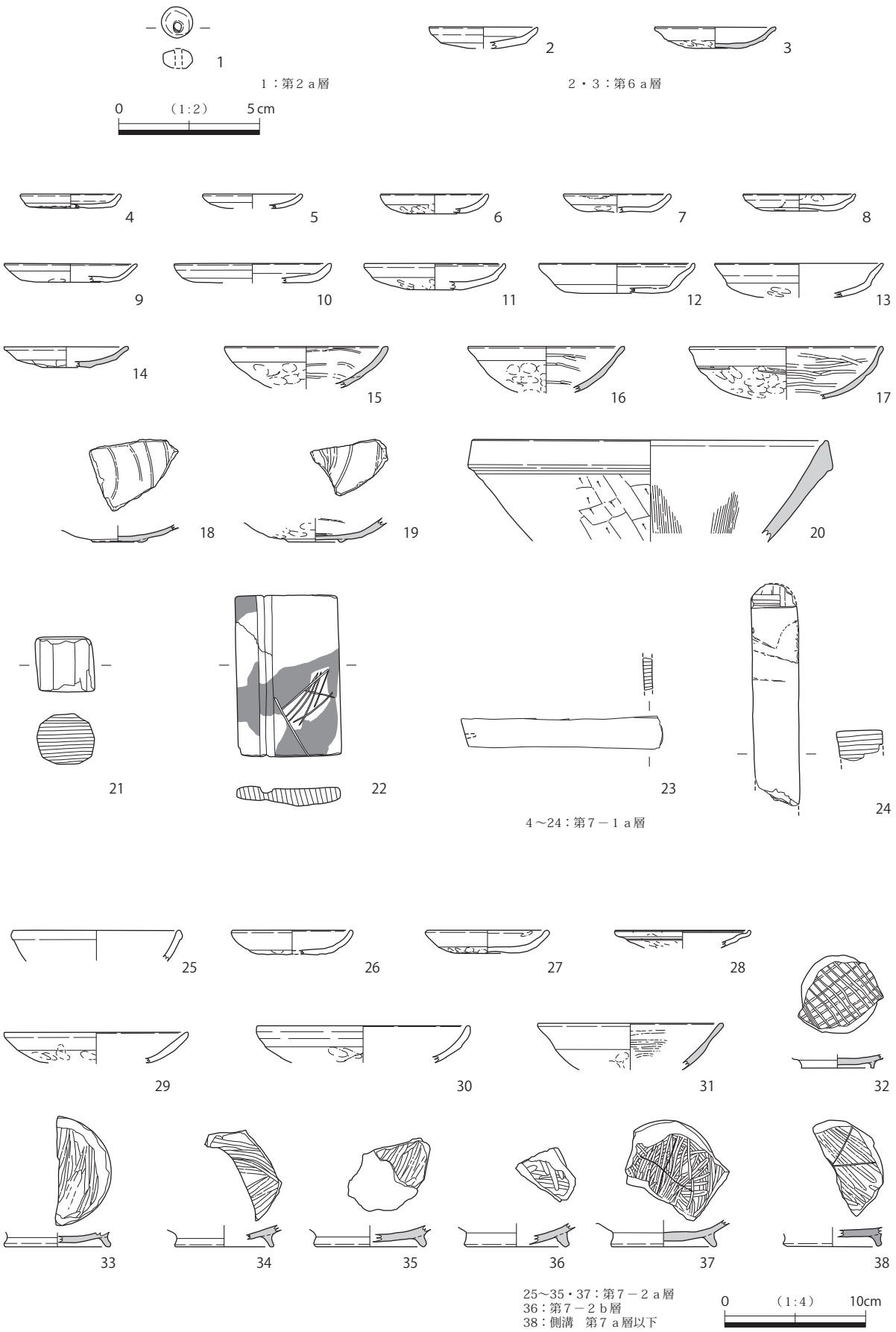


図 11　第２ａ層～第７－２ａ層関連　出土遺物

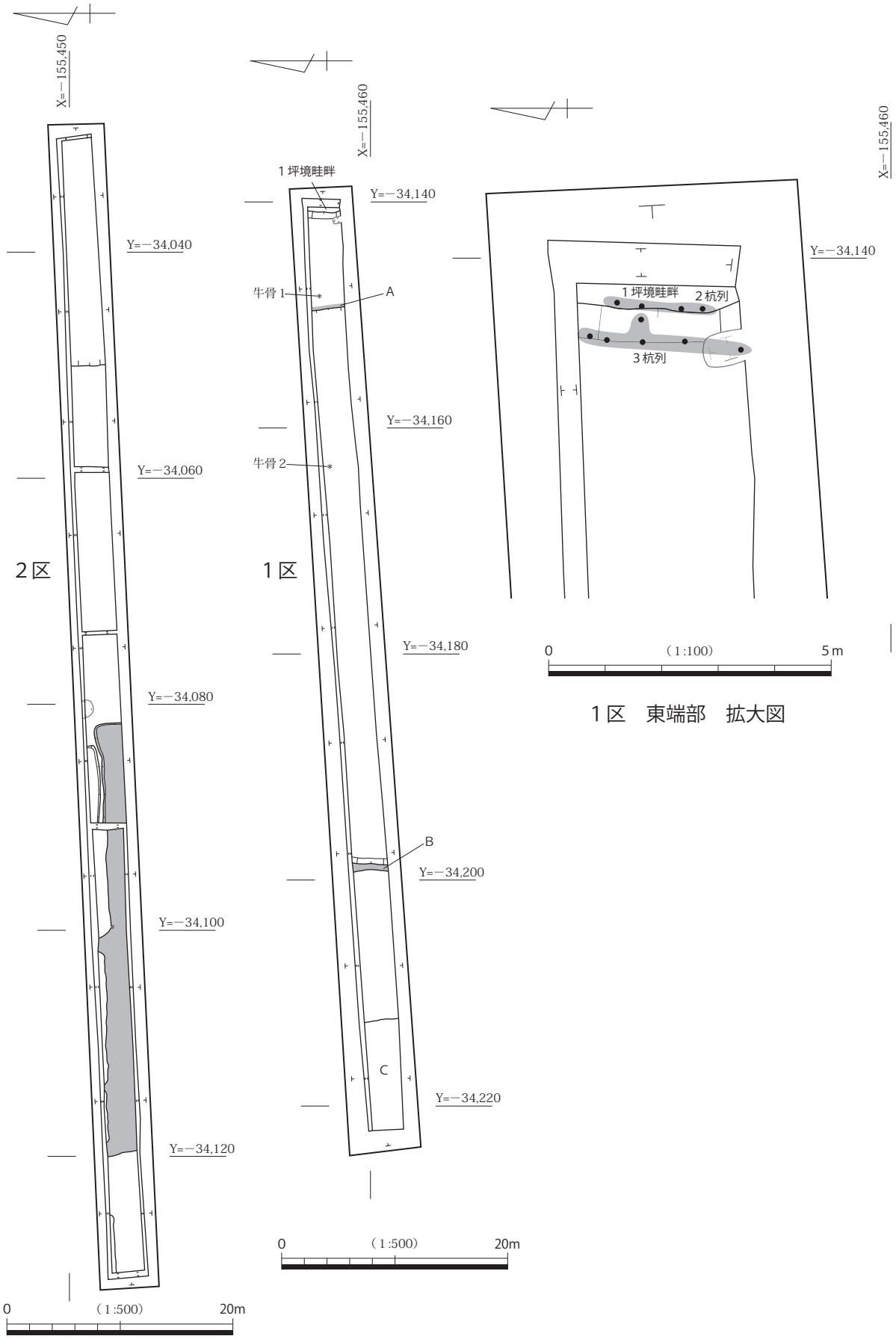


図12　1区・2区　第8a面　平面図、1坪境畦畔　平面図

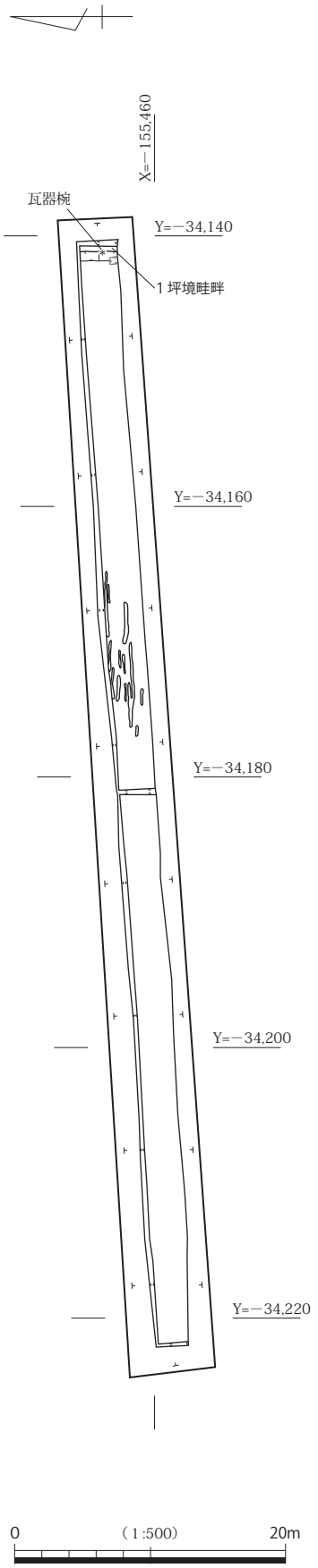


図 13　1 区　第 9 a 面　平面図

なお、1 区東側では灰白色の中粗砂層（図 15　土層 15）を介して第 8 a 層が細分できる。調査区東端において、砂層の下面（図 15　土層 1 6 上面）で部分的に平面精査を行ったところ、坪境畦畔を検出した（図版 2 － 3）。図 15 の断面をみると坪境より西側は溝状に窪んでいることが分かる。

2 区では全体に水平に遺構面の検出を行ったが、直線的に土質が異なる部分や、高低差が確認できた。耕地区画を反映するものと考えられる。まず、調査区西半では南側のトーン部分が上層の踏込みが多く残る範囲となる。西端は 1 区と同様、砂質土で細砂を介して 2 層に細分できる。この範囲では多くの足跡がみられた（図版 7 － 3）。この砂質土は 2 区で基本とした第 8 a 層より上位の層となる。砂質土 2 層を除去したのが図版 8 － 1 である。Y ＝－ 34,120 m ラインで足跡がない部分が確認できた。畦畔の痕跡と考えられる。

第 7 － 2 b 層の出土遺物、第 8 a 層の出土遺物より 11 世紀後半～末頃の遺構面と考えられる。

第 9 a 面（図 13、図版 3）

第 8 a 層を除去して検出した同層下面の遺構面である。遺構面の高さは 1 区東半が約 T.P.+11.3 m、西半が T.P.+11.2 m を測り、上面と同様、西側に向かって下降する。2 区では第 9 層がほとんど残らない。第 8 層を除去すると、Y ＝－ 34,100 m ラインより東側では第 11 層が露出する。これより西側でわずかに確認できた。T.P.+11.4 m前後を測る。

1 区ではわずかに第 8 － 2 b 層が残る部分もあるが、大部分では第 8 － 2 b 層は残らず、第 8 a 層を除去すると第 9 a 層に至る。砂の入った足跡の分布や土色に違いが認められたが、1 坪境畦畔以外の畦畔、耕地段差は確認できなかった。調査区東端で南北方向の 1 坪境畦畔を検出した。水田面から約 0.2 m の高さを有する。これは上面で検出した 1 坪境畦畔の前身の坪境畦畔で、第 9 a 層上面以降、第 7 － 2 a 層上面まで踏襲されている。1 坪境畦畔の上面で瓦器椀が出土した（図版 3 － 3）。坪境畦畔直下では 10×15 ㎝程度の自然礫が出土している。調査区中央の Y ＝－ 34,160 m ラインと Y= － 34,180 m ライン間で東西方向の平行する溝を検出した（図版 3 － 1）。幅 0.2 ～ 0.3 m と狭く、深さ 0.05 m に満たない浅い溝で、耕作に伴う溝と考えられる。

2 区では前述のとおり、第 9 a 層は西側でわずかに確認できたのみである。第 9 a 面の平面的な調査は行っていない。

第 9 a 層の出土遺物から、11 世紀を中心とする遺構面と考えられる。

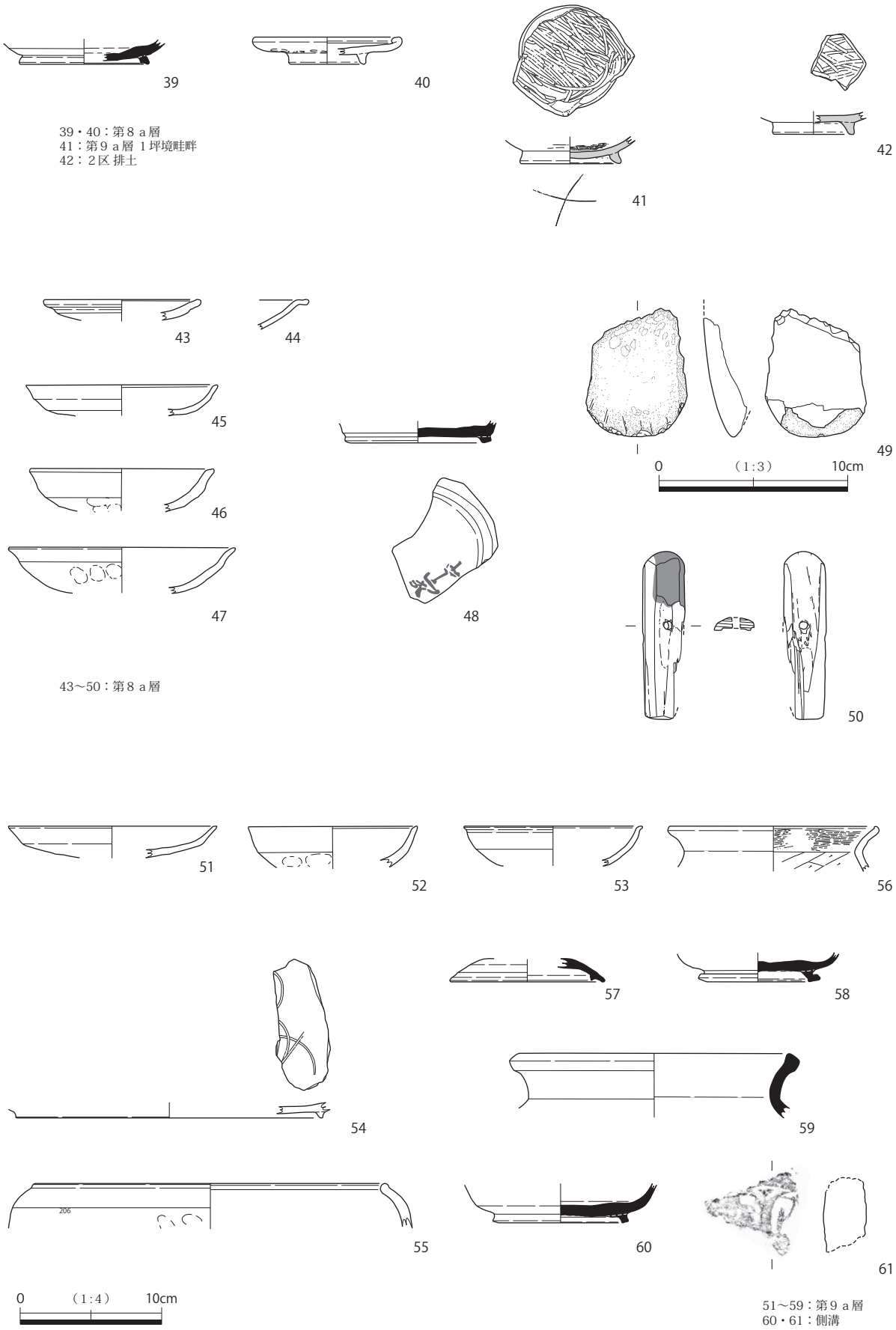


図 14　第８ａ層・第９ａ層関連　出土遺物

第８ａ・９ａ層関連出土遺物（図 14、図版 15・16）

図 14 － 39 ～ 50 は第８ａ層出土遺物である。１区の第８層からは遺物の出土が少なかったが、２区では多くの遺物が出土した。これは、２区東側は第８ａ層と第９ａ層が同一層になっていることによるものと考えられる。

39 ～ 42 は１区から出土した。39 は須恵器杯身底部である。高台の端面は凹線状に窪む。40 は土師器の台付皿である。高台は断面三角形を呈し、口縁部は折り返して玉縁状となる。胎土は精緻でにぶい黄橙色を呈する。41 は第９ａ面で検出した１坪境畦畔の上部で出土した瓦器椀である。見込みはヘラミガキを密に施す。高さのある断面三角形の高台がハの字状に外に張り出す。高台内には × のヘラ書きがみられる。42 も瓦器椀である。２区排土からの出土であるが、ここに掲載した。底部は平らで見込みにはヘラミガキを密に重ねる。

43 ～ 50 は２区第８ａ層から出土した。図化した遺物はあまり多くないが、前述のとおり上層に比して遺物の出土は多く、土師器、須恵器、縄文土器、石器等と時期幅のある遺物が出土した。

43・44 はいわゆるての字状口縁の土師器皿である。43 は器壁が厚く、胎土は精緻で色調は白色系を呈する。44 は器壁が薄い。45 は土師器皿で、口縁部は二段にヨコナデし、外反する。46 は土師器杯である。器壁が厚い。口縁端部はやや外側に肥厚する。47 は土師器杯である。口縁部をヨコナデし強く外反させる。体部外面の指オサエは顕著である。胎土は精緻で、軟質である。48 は須恵器杯身である。焼成はやや軟質で灰白色系を呈する。平らな底部から屈曲して体部がまっすぐ上外方に延びるものと考えられる。底部際に断面四角形の高台を有する。高台内に「中家」の墨書がある。８世紀末～９世紀前半の所産と考えられる。

49 は磨製石斧である。基部は欠損している。２区の第８ａ層からは他に石器が出土している。これらの遺物は下層の巻き上げと考えられる。

39・48 の須恵器など古代の遺物も含むが、41・42 の瓦器椀、43・44 のての字状口縁皿から 11 世紀後半～末を中心とした時期が与えられる。

他に木製品が出土した。50 は柄と考えられる。２枚の板材を合わせるものと考えられ、目釘穴が上方に穿たれる。表面は丁寧に削られ、柄の上端は丸味をもって仕上げられる。内側には茎部を挿入させるための浅い刳り込みがみられる。刳り込みは茎の形状に合わせるためか、下方に向かって細くなっている。刳り込み部分は茶褐色になっており、柿渋等が塗布されていると考えられる。外面は一部炭化していた。

51 ～ 59 は第９ａ層出土遺物である。第９ａ層からは細片の遺物が多く、図化した遺物は少ないが、土師器、須恵器など上層に比して多く出土した。

51 は土師器皿である。52・53 は土師器杯である。52 は器壁が厚い。体部外面は指オサエの痕跡が残る。53 は口縁端部を横につまみ上げる。口縁部はヨコナデを施す。54 は高台付皿である。内面には暗紋がわずかに残る。55 は土師器鉢である。口縁端部は玉縁状に丸く収める。器面は磨滅し、調整は不明である。56 は土師器甕である。口縁端部は内側につまみ上げる。口縁部内面は横方向にハケメを、体部内面はケズリを施す。口縁部外面は煤が付着し、体部外面は被熱のためか、器壁が剥離している。90（図版 16）は土師器鍔釜である。

57 ～ 59 は須恵器である。57 は杯蓋。58 は高台を有する底部である。壺か。高台は高く、ハの字に開く。59 は甕である。

60・61 は側溝から出土した遺物で、帰属層は明確ではないがここに掲げた。60 は須恵器杯身である。断面四角形の高台を有する。61 は遺存状況が悪いが、蓮華紋軒丸瓦である。

その他、漆付着土器や製塩土器が出土した。図版 15 右下に掲載した。86・87 は漆付着土器である。86 は土師器杯の内面に、87 は須恵器杯身の底部内面に漆が付着している。88・89 は製塩土器である。いずれも口縁部が残る。88 は内面に細かい布目が残る。89 は比較的大きい破片である。内面はナデて平滑となるが、外面は未調整で粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る。

第９ａ層からは細片ではあるものの、時期幅のある遺物が多く出土しており、土層の年代把握が困難であった。図化した遺物は飛鳥、奈良時代の遺物が多いが、51 の土師器皿など平安時代と考えられる遺物も含む。第９ａ層を耕作土と考えているが、遺物の出土量が耕作土としては多いことから、下層の包含層を攪拌している可能性が考えられる。下層の第 10 ａ層の年代観から７世紀以前の遺物は下層の巻き上げと考え、８世紀～ 11 世紀と時期幅をもって考えておきたい。また、漆付着土器、製塩土器、軒丸瓦の出土が注目できる。

第 10 ａ面（図 15・16、図版４・８・９－３）

第９ａ層を除去して検出した同層下面の遺構面である。遺構面の高さは１区東が約 T.P.+11.2 m、中央付近が約 T.P.+11.1 m、西端は T.P.+11.0 mとなり、西側に向かって下降する。上面では比高差が 0.1 m前後であったが、第 10 ａ面では 0.2 mとなり、坪内の高低差が大きくなっている。２区では第８層を除去すると、Y ＝－ 34,100 mラインより東側では第 11 層が露出する。Y= － 34,100 mラインより西側は一段低くなり、第 10 ａ層が遺存する。T.P.+11.2 ～ 11.3 mを測る。なお、２区の第 11 層が露出する範囲で検出した遺構については、第 11 －１ａ面で述べることとする。

１区では調査区東端で４溝を検出した。４溝は南北方向に調査区外に延びる。幅１～ 1.5 mを測り、深さは 0.1 m以下と浅く、溝の埋土は第９ａ層である。掘削された溝というよりは、溝状の窪みといった状況である。溝からは土師器皿や須恵器蓋が出土した（図 21 － 63・64）。調査区東半では第９ａ層もしくは、その母材であった第９ｂ層が足跡状にみられたが、図 15 のＡ～Ｃは踏込みが少なかった。第９ａ層の疑似畦畔の可能性が考えられる。調査区西半は踏込みが少なく、２箇所でわずかに段差を確認した。上面の耕地段差を反映するものと考えられる。第 10 ａ面を検出した段階でほぼ工事影響深度に達した。第 10 ａ層の一部を床付けまで掘削して、１区調査を終了した。なお、床付け面（第 10 層中）では数か所で噴砂を確認した。

２区では東西方向の 10 畦畔を検出した（図版８－３・４）。第９ｂ層は薄く、水田面を覆っているというより、踏込み状に残るのみで、10 畦畔の上部にだけかろうじて残っていた。このような状況から、ｂ層で覆われた水田面というより、第９ａ層の下面遺構と捉える方が妥当と考える。水田面の高さは 10 畦畔より東は T.P.+11.3 m前後を測るが調査区西端では T.P.+11.2 m前後となっている。このような状況から、東側が高く、西側に向かって下降する水田面と考えられる。

１区、２区の状況から、第 10 ａ面で検出した遺構はほぼ方位に沿っており、条里型水田に伴うものと考えられる。溝や畦畔は第９ａ層下面遺構と捉えることができ、少なくとも第９ａ層まで条里型水田が遡る可能性が考えられる。第９ａ層からは時期幅のある遺物が出土しており、下面遺構の時期を確定するのは困難ではあるが、第９ａ層上面で 11 世紀末頃の瓦器椀が出土していることから、これよりは古い土層といえる。平安時代の遺構面と考えられる。

その他、２区では８溝を検出した。調査区西半に位置する溝で、北北西―南南東方向に延びる溝であ

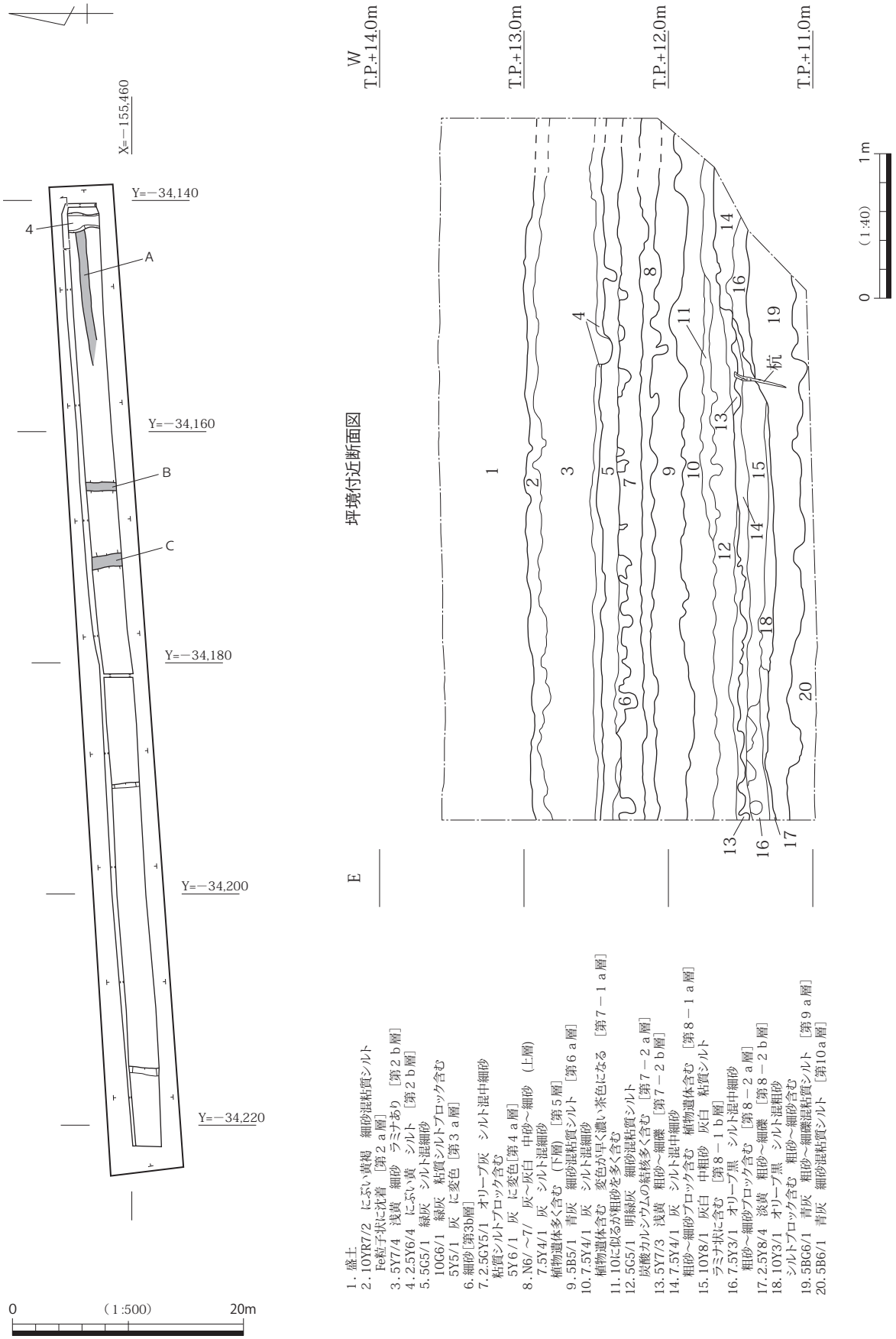


図 15　1 区　第 10 ａ面　平面図、1 坪境畦畔付近　断面図

る。幅約１m、深さ約0.15 mを測る。埋土はオリーブ灰色の粗砂礫でシルトをラミナ状に含む。断面は凸状を呈している（図版９－３）。周辺の第９ｂ層の粗砂礫はこの溝を埋めた砂礫層と同一である可能性が考えられる。第10 ａ層上面に帰属する遺構と考えられる。溝内からは須恵器の壺かと考えられる体部片、土師器高杯片などが出土した。

第 11 － 1 ａ面　（図 16　図版９）

第 11 ａ層は上層までと異なり、暗色の強い土壌化層である。第 11 ａ層の上面、および下面では、溝を検出した。溝は正方位にはのびず、第 11 ａ層を境に、大きく景観が変わったことが分かる。

これ以下の調査は２区のみで行った。遺構面の高さはＹ＝－ 34.100 mより東側は約 T.P.+11.4 ～ 11.5 mを測り、これより西側、８溝より東の範囲は T.P.+11.3 m前後となる。８溝より西側はさらに低くなり、T.P.+11.2 m前後でも第 11 － 1 ａ層に至らなかった。第 11 － 1 ａ面では溝を５条検出した。

７溝（図 18　図版９－２）

調査区中央付近に位置し、北北西―南南東方向に延びる溝である。幅

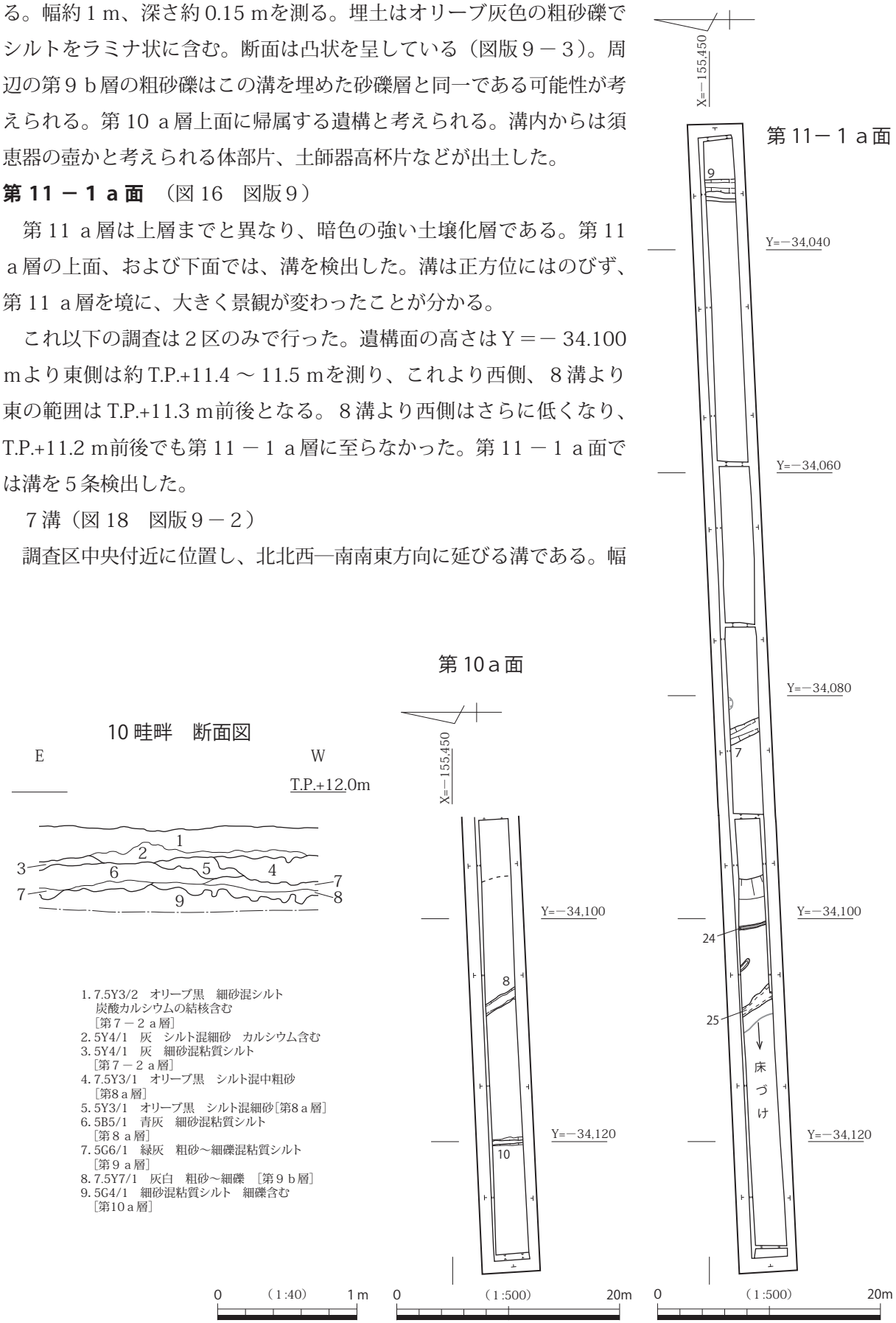


図 16　２区　第 10 ａ面・第 11 － 1 ａ面　平面図、10 畦畔　断面図

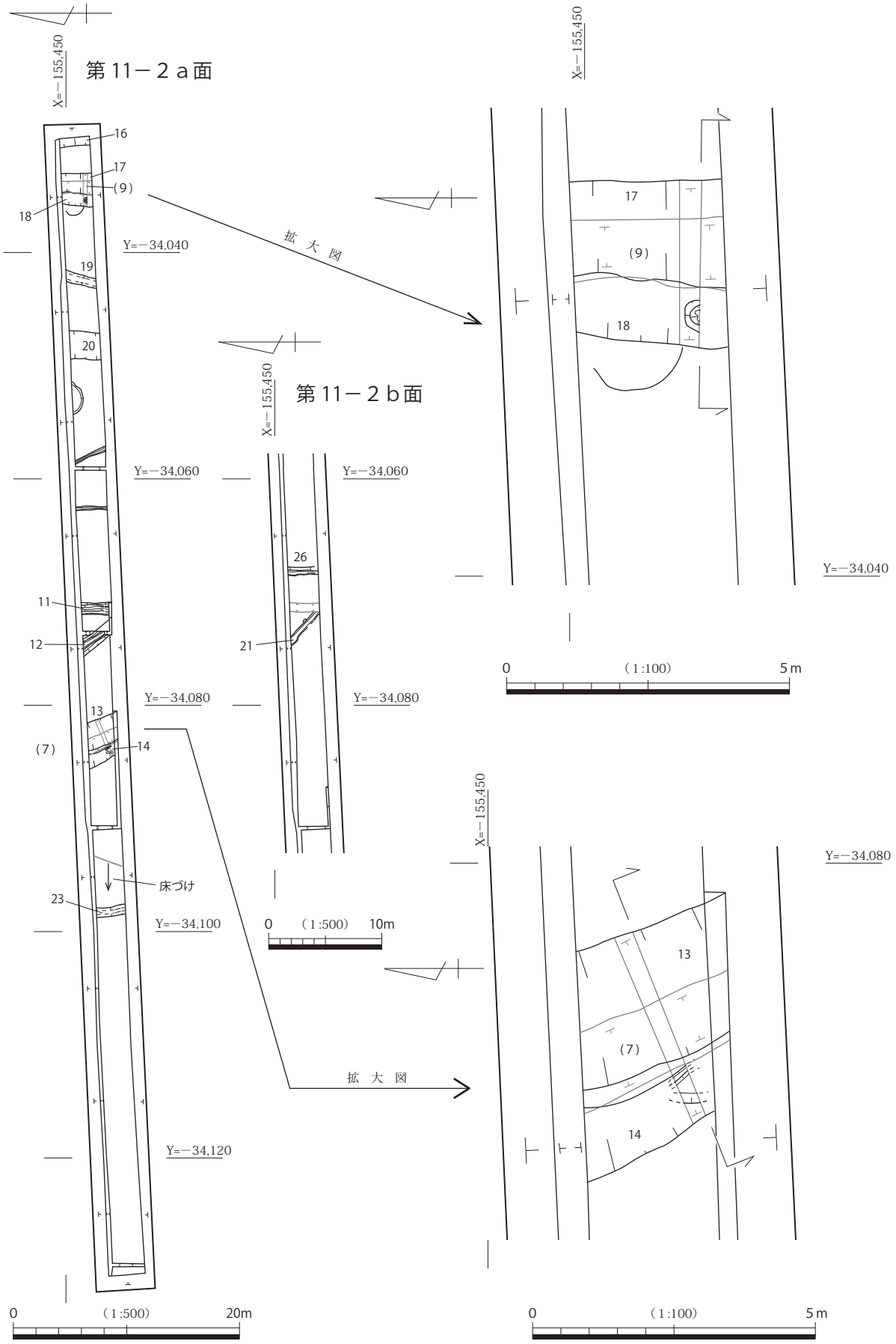
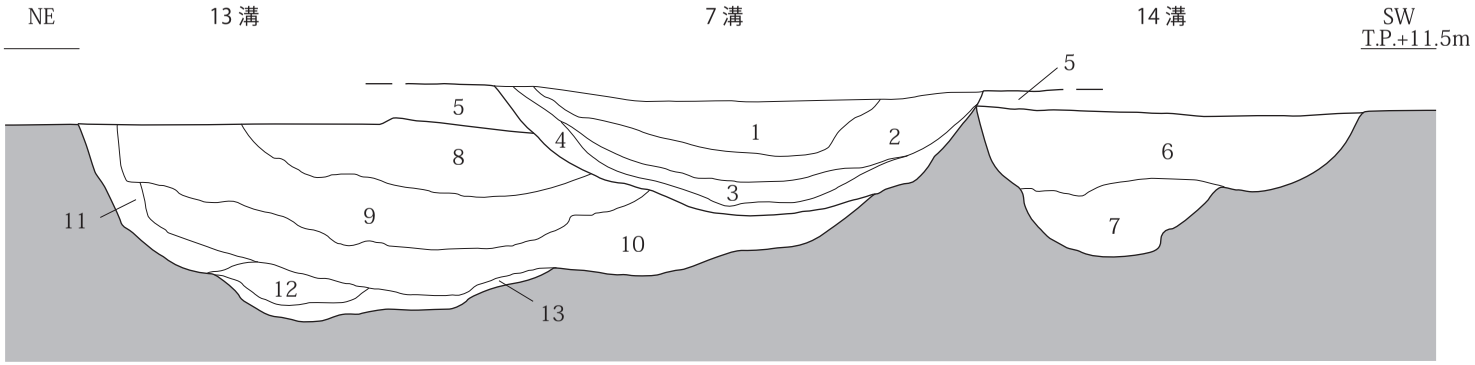
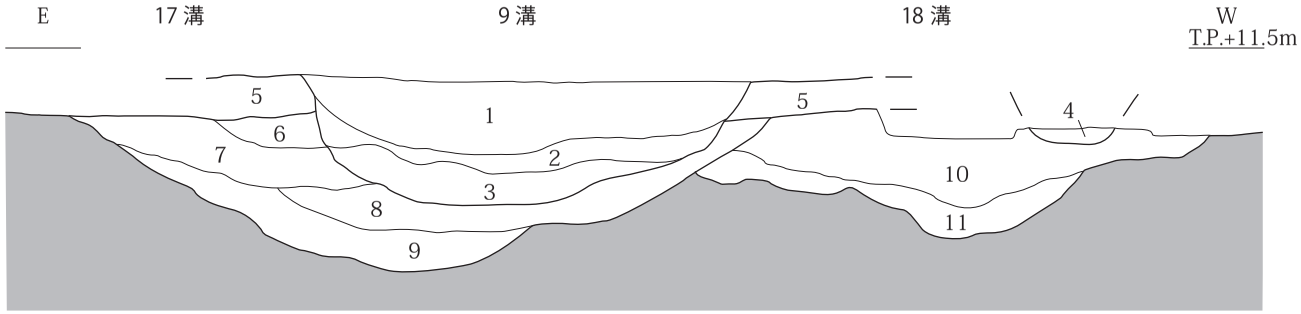


図17　2区　第11－2ａ面・第11－2ｂ面　平面図



1．5B4/1　暗青灰　細砂混粘質シルト　炭含む
2．5P4/1　暗紫灰　細～中砂混粘質シルト　炭多く含む
3．7.5Y5/2　灰オリーブ　細砂　5P4/1　暗紫灰　細砂混シルト含む(特徴的)
4．5P5/1　紫灰　細砂混粘質シルト　炭含む
5．第11ａ層
6．5P4/1　暗紫灰　細砂混粘質シルト　炭含む
7．5PB3/1　暗青灰　細砂混粘質シルト
8. 5P4/1　暗紫灰　細砂混粘質シルト　炭含む
9. 5B4/1　暗青灰　細砂混粘質シルト　粗砂わずかに含む　炭含む
10. 5PB4/1　暗青灰　細砂混粘質シルト
11. 5P4/1　暗紫灰　粘質シルト混細砂　炭含む
12. 5PB3/1　暗青灰　粘質シルト混中粗砂
13. 5B4/1　暗青灰　細砂混粘質シルト



1．5P3/1　暗紫灰　細砂混粘質シルト　炭多く含む　炭の粒子大きい　細礫わずかに含む
2．5B5/1　青灰　細砂混粘質シルト
3．5B5/1　青灰　細砂混粘質シルト　上より砂質高い　細砂筋状に含む　流水あると考えられる
4．5P3/1　暗紫灰　細砂混粘質シルト　炭含む　細礫わずかに含む
5．第11－１ａ層
6．5PB5/1　青灰　細砂混粘質シルト
7．5PB4/1　暗青灰　細～粗砂混粘質シルト
8．5P5/1　紫灰　シルト混中粗砂　炭含む　細礫含む
9．5P5/1　紫灰　シルト混中粗砂　炭、細礫含む
10. 5B3/1　暗青灰　細砂混シルト　5に比して砂の混じり少ない　炭含む　粘る
11. 5PB5/1　青灰　細砂混粘質シルト　ベースの10YR7/2　にぶい黄橙　細砂　シルト(生痕)含む

図18　9・17・18溝、7・13・14溝　断面図

1.3 m、深さ 0.3 mを測る。埋土は上層が暗青灰、暗紫灰色の砂混シルトで埋土２は炭を多く含んでいる。下層は灰オリーブの砂層、最下層は紫灰色の細砂混粘質シルトである。下層の状況から流水があったものと考えられる。溝からは図化できなかったが、須恵器甕の細片、土師器の細片が出土した。

９溝（図 18　図版 11 －１・２）

調査区東側に位置し、南北方向に延びる溝である。幅 1.2 m、深さ 0.35 mを測る。埋土は上層が暗紫灰、青灰色の砂混粘質シルトで埋土１は粒子状に炭を多く含む。下層は青灰色の細砂混粘質シルトで細砂が筋状にみられることから、流水があったものと考えられる。

溝からは土師器片、弥生土器片などが出土した。また、９溝の下部を掘削時に土器片が比較的多く出土したがこれは下面の 17 溝に帰属するものと考えられるため、後述する。

９溝の西側に平行して南北方向に延びる溝を検出した。幅は 0.2 m前後と狭い。

25 溝　（図 19）

25 溝は第 10 ａ面の８溝の直下で検出した（床付けまで掘削して検出）。北北西－南南東方向に延びる溝である。25 溝の埋土のうち、１は細礫を多く含み粘質のあるシルトで特徴的である。溝は全掘しておらず、湧水も著しかったことから、詳細は不明である。

これらの溝の時期は７溝で須恵器片が出土しており、奈良時代を中心にする時期を考えたい。

第 11 － 2 ａ面（図 17　図版 10、11、12）

第 11 － 1 ａ層を除去した遺構面である。Y= － 34,070 mライン付近より東側は第 11 － 2 ｂ層が露出する。これより西側は第 11 ａ層が２層に細分され、第 11 － 2 ａ層上面となる。第 11 － 2 ａ層は Y = － 34,095 mあたりで西に向かって落込んでいるものと考えられるが、工事影響深度に達しており、詳細は不明である。

第 11 － 2 ａ面では溝や浅い落込みを検出した。溝はほぼ南北方向に延びるもの、西に振るものがある。全体的な傾向として、東半の溝が南北に近く、西半の溝はやや西に振る傾向がみられる。

13・14 溝（図 18　図版 12 －１）

13・14 溝は調査区中央付近で検出した溝である。13 溝は幅約 2.1 m、深さ約 0.55 mを測る。埋土は上層が暗青灰色、暗紫灰色の粘質シルト層、下層が暗紫灰、暗青灰色の砂質土、最下層が暗青灰色の粘質シルトである。14 溝は幅 1.0 m、深さ 0.4 mを測る。埋土は上層が暗青灰色の細砂混粘質シルト、下層が暗紫灰色の粘質シルト層である。いずれの溝からも土器片が出土したが時期は不明である。

17・18 溝（図 18　図版 11 －１・２・３）

17・18 溝は調査区東側で検出した溝である。17 溝は幅 1.85 m、深さ 0.4 mを測る。埋土は上層が青灰色、暗青灰色の粘質シルト、下層は紫灰色の砂質土である。溝からは高杯、甕体部、壺口縁部を含む土師器、弥生土器甕などが出土した。一部、９溝の下部を掘削中に出土したものもあるが、17 溝と切りあっているため、本来は 17 溝の遺物であったと考えている。古墳時代前期の時期が考えられる。18 溝は 17 溝に前出する溝で幅 1.3 m以上、深さは約 0.3 mを測る。埋土は上層が暗青灰色のシルト、下層が青灰色の粘質シルトである。トレンチ状に掘削しているため、全体は不明であるが、溝の深い部分はピット状に窪んでいるようである。

これら４条の溝はそれぞれ上面に７・９溝が位置しており、規模、埋土は 13 溝と 17 溝、14 溝と 18 溝がそれぞれで類似している。このことから、同様の規模の溝が同時期に掘りなおされていることが推測できる。なお、溝はいずれも全掘しておらず、トレンチで堆積状況を確認するにとどめている。

そのため、出土遺物も小片に限られている。

11・12・19 溝（図 19　図版 11 － 4、図版 12 － 2）

11・12 溝は調査区中央付近に位置する溝である。12 溝は幅 1.2 m、深さ 0.2 mを測る。埋土は上層が灰色の粘質シルトを、下層が青灰色の砂質土を呈する。遺物の出土はない。11 溝は幅 1 m、深さ 0.35 mを測る。埋土は上層が灰色の粘質シルトで細礫を多く含み、下層が暗青灰色の粘質シルトを呈し、第 11 b 層の小ブロックを含む。土器片が 2 片出土したが時期は特定できない。

19 溝は 18 溝の西側に位地する溝で、幅 0.85 m、深さ 0.35 mを測る。二段落ちになっている。埋土の上層は灰色の粘質シルト、下層は暗灰色の粘質シルトである。下層には第 11 b 層の小ブロックを含む。溝内から突帯文土器の深鉢片が出土した（図 21 － 81）。

23 溝（図 19　図版 12 － 3）

23 溝は調査区西半に位置する溝である。幅 0.9 m、深さ約 0.25 mを測る。埋土は青灰色、暗青灰色の細砂混粘質シルトで炭を含む。また、細礫を多く含む点が特徴的である。トレンチ調査のみで全掘していない。遺物の出土はない。

20 溝（図 20　図版 11 － 5）

調査区東側に位置する溝である。幅 2.4 mを測り、南北方向に調査区外に延びる。堆積状況を把握す

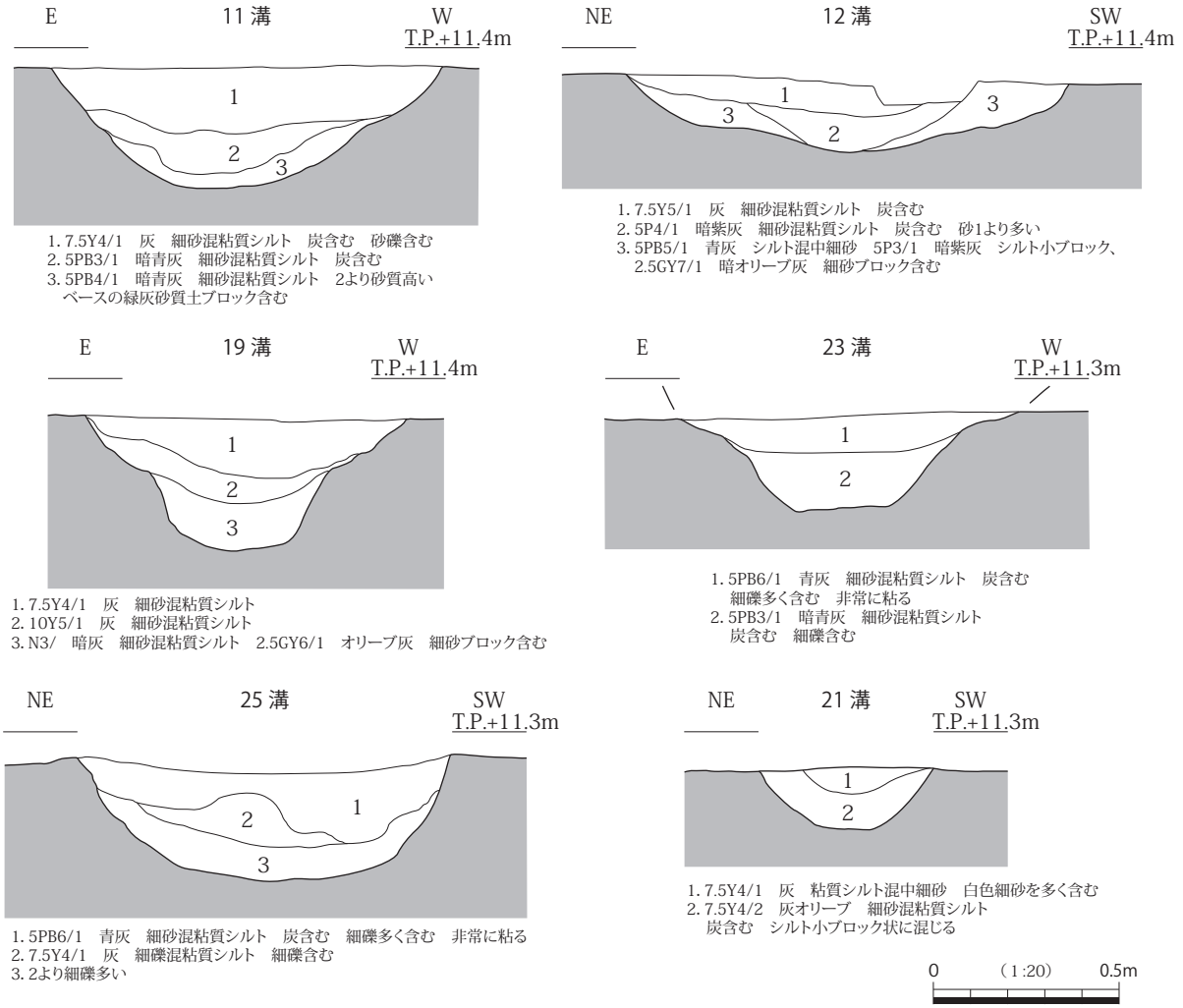


図 19　11・12・19・23・25・21 溝　断面図

るためにトレンチ状に掘削したが、溝の底部には達しなかった。深さ 0.9 m以上を測る。埋土はいずれもオリーブ色系の細砂混粘質シルト、灰色、浅黄色系の砂層のブロック土が混合しており、人為的に埋め戻されている。オリーブ黒色の粘質シルトは第 11 － 1 a 層のブロックの可能性が高い。第 11 a 層には立ち上がりは確認できなかったが、上層からの切り込みか。遺物の出土はない。

これらの溝の時期は古墳時代前期を中心とするものと考えられる。第 11 － 2 b 層が露出している範囲で検出した 19 溝は縄文時代晩期末の時期が与えられる。

第 11 － 2 b 面（図 17　図版 12 － 5）

第 11 － 2 a 層を除去した遺構面である。T.P.+11.2 m前後を測る。東側とは約 0.1 mの段差となる。調査区西半は掘削限界に達したため、掘削できなかった。

第 11 － 2 a 層を除去、第 11 － 2 b 層が露出した部分で溝を２条検出した。

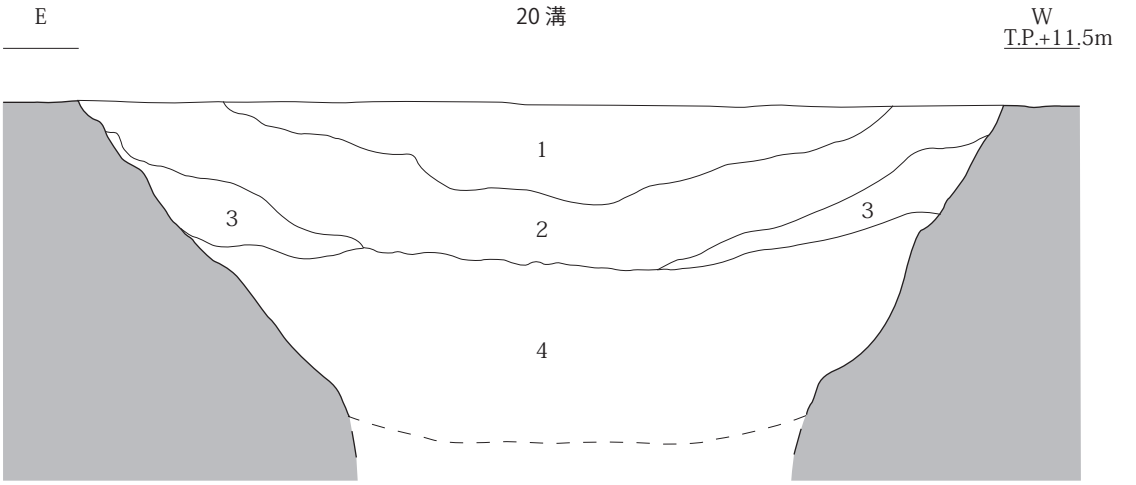
21 溝（図 19　図版 12 － 4）

幅 0.45 m、深さ 0.15 mを測る。埋土は上層が灰色の粘質シルト混細砂、下層が灰オリーブの細砂混粘質シルトである。遺物は出土していない。

26 溝（図版 12 － 5）

幅約 0.4 m、深さ 0.05 ～ 0.1 mを測る。溝周辺の第 11 － 2 a 層を掘削していた際、縄文土器片が出土し、さらに溝からも縄文土器片が出土した。図 21 － 85 の縄文時代晩期中葉（滋賀里Ⅲ式）の深鉢である。このことから縄文時代晩期中葉の時期が与えられる。

第 11 － 1 a 面～第 11 － 2 b 面では溝を検出した。これらの溝は第 11 － 1 a 面の上面、下面でほぼ同じ位置に掘りなおされていた。既往の調査でも同様の溝が検出されている。溝は類似した場所に掘削されており、検出面が異なっているものもある。当調査区では調査範囲が狭小であることに加え、溝も完掘できておらず、各遺構、遺構面の時期の特定が困難である。既往の調査との対応で考えれば、第 11 － 1 a 面が（その２）調査の第８面（奈良時代）、第１ 1 － 2 a 面が（その２）調査の第９面②（弥生時代前期～古墳時代前期）、第 11 － 2 b 面が（その２）調査の第９面①（縄文時代晩期後半）とな



1. 7.5Y4/1　灰　細砂混粘質シルト　7.5Y7/3　浅黄　中細砂　10cm前後のブロック混合土
2. 10Y3/1　オリーブ黒　細砂混粘質シルト　炭含む　7.5Y7/3　浅黄　中細砂　1より多い　10cm前後のブロック混合土
3. 7.5Y6/1　灰　細砂　10Y3/1　オリーブ黒　細砂混粘質シルト　炭含む　のシルトブロック小含む
4. 10Y3/1　オリーブ黒　細砂混粘質シルト　炭含む
　7.5Y6/1　灰　細砂
　7.5Y4/3　暗オリーブ　細砂混粘質シルト　ブロック混合土
　下部は10Y3/1　オリーブ黒　細砂混粘質シルト　炭含む　のシルトブロックが多く、大きい

0　（1:20）　0.5m

図 20　20 溝　断面図

る。わずかに出土した遺物とも矛盾せず、概ね（その２）調査と同様の時期と考えたい。

既往の調査では溝は調査地の中の高所を放射状に南東から北に向かって流れている。今回の調査区でも方向は同様と推測でき、やはり調査区東側の高い部分で幾度も掘りなおされているようである。その性格は不明であるが、耕地の開発に関連した水路であろうか。

第８ａ層以下、古墳時代後期～奈良時代の遺物が多数出土したが、これらの時期の遺構は第 11 － 1 ａ面で検出した溝の他は検出できなかった。

第 10 ａ層関連出土遺物（図 21　図版 15 ～ 17）

図 21 － 62 は第 10 ａ面で出土した。63・64 は 4 溝から出土した。62・63 は土師器皿である。62 は口縁部はヨコナデで外反する。63 は口縁部はヨコナデ、体部は指オサエ痕跡が明瞭に残る。口縁端部は内側に小さく肥厚する。いずれも 9 世紀頃の所産と考えられる。64 は須恵器杯蓋である。

65 ～ 73・75 は第 10 ａ層出土遺物である。74 は側溝から出土した遺物である。土師器、須恵器が出土した。

65 ～ 70 は土師器である。65 ～ 67 は杯である。65 は直径の小さい杯で体部内面に放射状の暗文を施す。口縁端部はつまみ上げる。66 は体部内面に放射状の暗文を施す。67 は口縁端部は内側に肥厚する。遺存状況は悪いものの、体部内面に放射状暗文を施す。68 は高杯である。浅い椀形の杯部を呈する。脚部内面には絞り痕が明瞭に残る。図版 16 － 91 は甕体部片である。大きく扁平な把手を有する。体部外面はハケメ、内面はケズリを施す。

69 は甕である。口縁端部はつまみ上げるようにヨコナデし、端部が尖る。頸部の屈曲は弱い。口縁部内面はハケメ、体部外面下半は指オサエ痕が残る。70 は土師器甕である。頸部は締まり、口縁部は直線的に大きく開き、端部は肥厚する。器壁は薄い。古墳時代前期。

71 ～ 74 は須恵器杯である。71 は杯身である。72 は杯蓋、73・74 は杯身である。いずれも口径が大きい。72 は天井にヘラ記号がある。75 は平瓶の口縁部か。沈線がめぐる。

第 10 ａ層からは 72 ～ 74 の 6 世紀後半の遺物の他、７世紀～８世紀初頭の遺物が目立ってみられた。掘削範囲が限られ、細片のため、時期の詳細が不明な遺物も多いが、古墳時代後期～飛鳥時代を第 10 ａ層の 1 点と考えたい。

第 11 ａ層関連出土遺物　（図 21　図版 17）

第 11 － 1 ａ層からは遺物の出土は少なかったが、縄文時代晩期末の突帯文土器や弥生土器、土師器、須恵器の他、石器やサヌカイト剥片などが出土した。

76 は 17 溝から出土した土師器高杯である。調査時には 9 溝下層として取り上げたが、下層に位置する 17 溝に帰属するものと考えられる。磨滅により調整は不明瞭であるが、外面は横方向のヘラミガキを施す。古墳時代前期。77・78・82 ～ 84 は第 11 ａ層、第 11 － 1 ａ層から出土した。79・80 は側溝からの出土であるが、ここに掲載した。77 は黒色土器Ａ類椀。上層からの混入か。78 は須恵器杯蓋である。79 は庄内式甕の口縁部である。器壁は薄く、口縁部内面はハケメ、体部内面はケズリである。80 は弥生土器甕である。体部外面にはタタキ痕が残る。弥生時代後期。弥生土器の出土は全体的に少なかったが、中期の遺物も出土している。81 ～ 84 は小片ではあるが、縄文時代晩期末（長原式）の突帯文土器深鉢である。81 は 19 溝から出土した。

第 11 － 2 ａ層は一部を掘削できたのみであるが、遺物の出土は非常に少ない。85 は縄文時代晩期中葉、滋賀里Ⅲ式の深鉢である。口縁部をくの字に屈曲する。体部外面には接合痕が残る。調整は磨滅

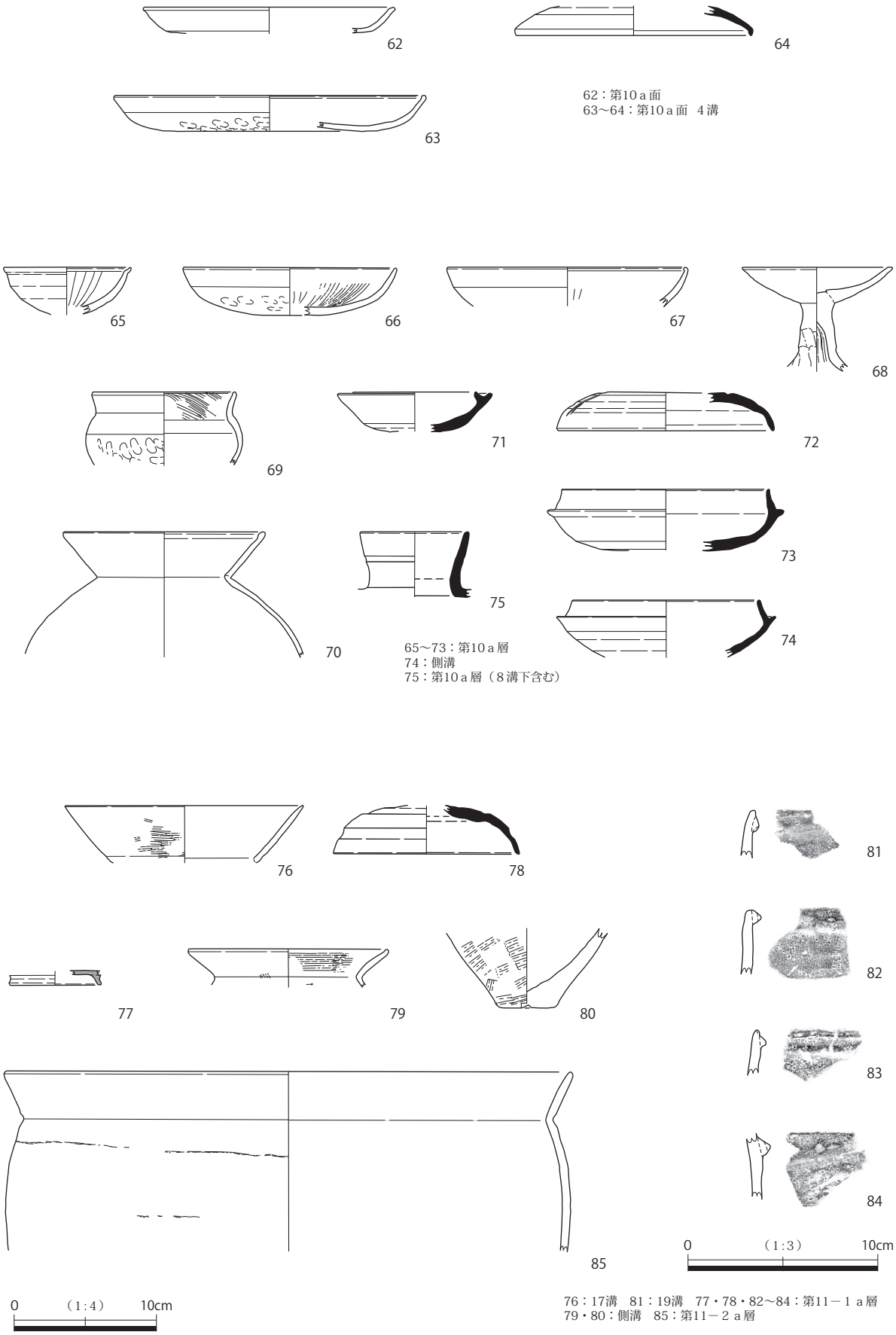


図21　第10ａ層・第11ａ層関連　出土遺物

のため、不明瞭であるが、口縁部外面にわずかに貝殻条痕の痕跡が残る。胎土には角閃石が含まれる。

その他、調査で出土した石器類を図版 17 下に掲載した。92 ～ 95 はサヌカイト製の打製石器である。92・93 は石鏃である。２区の第８・９ａ層から出土した。いずれも基部が欠損している。94 は楔形石器である。相対する２辺に潰れが認められ、他の２辺は折損している。17 溝から出土した。調査時には９溝下層として取り上げたが、下層に位置する 17 溝に帰属するものと考えられる。95 はスクレーパーである。側面はいずれも自然面で、背面は腹面に比して風化が進んでいる。刃部の加工は腹面からのみ行う。２区の第 11 －１ａ層から出土した。第 11 ａ層からは他にもサヌカイトの剥片や石核が出土している。

第１節で述べたように、第 11 －１ａ層と第 10 ａ層の関係は調査では十分に検討できなかったが、現地調査では、第 11 －１ａ層がこれより下位の地層と考えており、本報告でも層名を変更していない。第 10 ａ層の掘削範囲は限られているが、古墳時代後期～飛鳥時代の遺物が主体となっている。第 11 －１ａ層から古代と考えられる土師器小片、須恵器片がわずかながら出土した。踏込み等による上層の混入の可能性もあるが、２区東側の高所では縄文時代晩期末以降、11 世紀頃までは土壌が更新されるような土砂の供給がほとんどない。西側の低い部分では土砂の供給があり、遺構面が更新されている状況がみられる。よって、第 10 ａ層を低い部分での第 11 －１ａ層の細分層である可能性を考え、第 11 －１ａ層を縄文時代晩期末～古代頃の包含層と考えておきたい。第 11 －２ａ層は縄文時代晩期頃の包含層である。

第４章　まとめ

今回の調査では、縄文時代晩期以降の遺構、遺物を確認することができた。

基本層序でもまとめたように、縄文時代晩期頃には２区中央付近を境に東側が高くなり、西に向って下降する地形が復元できる。この高所を中心に第 11 －１ａ層、第 11 －２ａ層に関連する遺構面で溝を数条検出した。既往の調査では、調査区東側の高い部分で縄文時代晩期（長原式）の竪穴建物を検出した他、放射状に延びる複数の溝を検出している。当調査区では縄文時代晩期末には溝を検出したにとどまり、突帯文土器の出土も少なかった。居住域は当調査区までは広がらないものと考えられる。

また、既往の調査で検出した溝は弥生時代前期～古墳時代前期、奈良時代の２面あり、今回の調査でも出土遺物は希薄ながら、第 11 －２ａ面、第 11 －１ａ面で検出した溝がそれぞれ対応するものと考えられる（図 22 に既往の調査　弥生時代前期～古墳時代前期、当調査区第 11 －２a 面を合成した）。溝の位置する高まりは、縄文時代後期末から晩期中葉の河川が埋没した結果形成されたものである。今回の調査では掘削深度が浅く河川の調査はできなかったが、同様に下層に河川が位置するものと考えられる。遺構が位置する高まりは、河川の埋没過程をある程度、反映するものと考えられ、河川が側方に移動して形成されたポイントバーにあたるのであろう。また、検出した溝のうち、20 溝は他の溝より規模が大きく、ブロック土で埋没していることから人為的に一度に埋め戻されていることが分かる。出土遺物がなく帰属時期は明らかにできなかったが、明らかに他の溝とは異なっており、その帰属時期や機能など、今後の周辺の調査に期待したい。

８～ 11 世紀は当遺跡周辺の条里型水田の施行時期を考える上で重要であるが、第 10 ａ面で検出した最も古い条里型水田の時期（第９ａ層下面の時期）の特定は困難であった。既往の調査成果と同様、

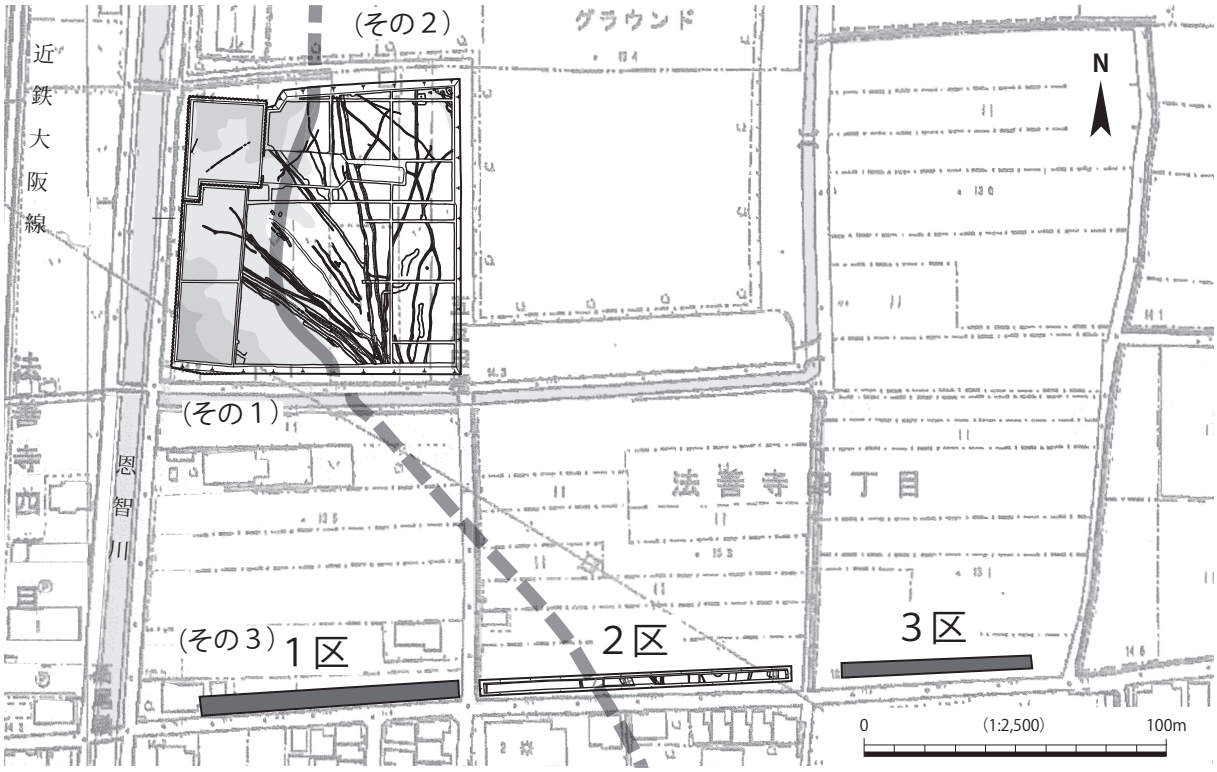


図 22　既往の調査　合成図

平安時代には条里に則った水田が広がっていたと考えられるが、今後、どこまで遡れるかが大きな課題である。

奈良時代には、縄文時代晩期以降の地形の凹凸が未だ解消されていなかったと考えられる。第10 a面でも２区中央から１区西まで約40㎝の比高差が認められ、西に向かって下降している。中世初頭頃（第８ａ面）にはようやく調査区全域で土壌が更新され、中世後期（第６ａ面）には１区、２区の比高差が10㎝程度と平坦になっている。それ以降、これまでとは逆に西側が高くなる傾向がみられた。中世前期には坪境に近い部分で土層が細分化され、この部分は他より砂質が高く粗粒の堆積物であることが指摘できた。坪境に沿って水路があった可能性が考えられる。１区東端で検出した１坪境畦畔は重要といえる。断面等の検討から、坪境畦畔は12世紀を境に東に移動していることが分かった。既往の調査でも（その１）調査の11世紀～12世紀前半頃の水田面とされる第10－１ａ面で畦畔の位置が上面とずれていることが指摘されており、興味深い成果となった。

次に出土遺物をみると、古墳時代後期～飛鳥時代の遺物が比較的多いことが指摘できる。当該期の包含層と考えた第10 a層と第11 a層の関係など、今後の周辺調査での検討が望まれる。また、古代の遺物では「中家」と書かれた墨書土器が注目される。今回は検討することが出来なかったが、建物等を示すものであろうか。その他、漆付着土器、製塩土器、軒丸瓦など一般集落ではあまり出土しない遺物が含まれていた。同様の遺物は既往の調査でも出土しており、調査地東側に推定される三宅寺（平野廃寺）を含めて、寺院や官衙等の存在を示唆するものといえよう。

縄文時代晩期以降、粗密はあるものの、途切れることなく各時期の遺物が出土した。関連する遺構の検出は少なかったが、今後、調査区周辺に各時期の遺構が広がる可能性を示唆するものといえ、今後の調査に期待される。

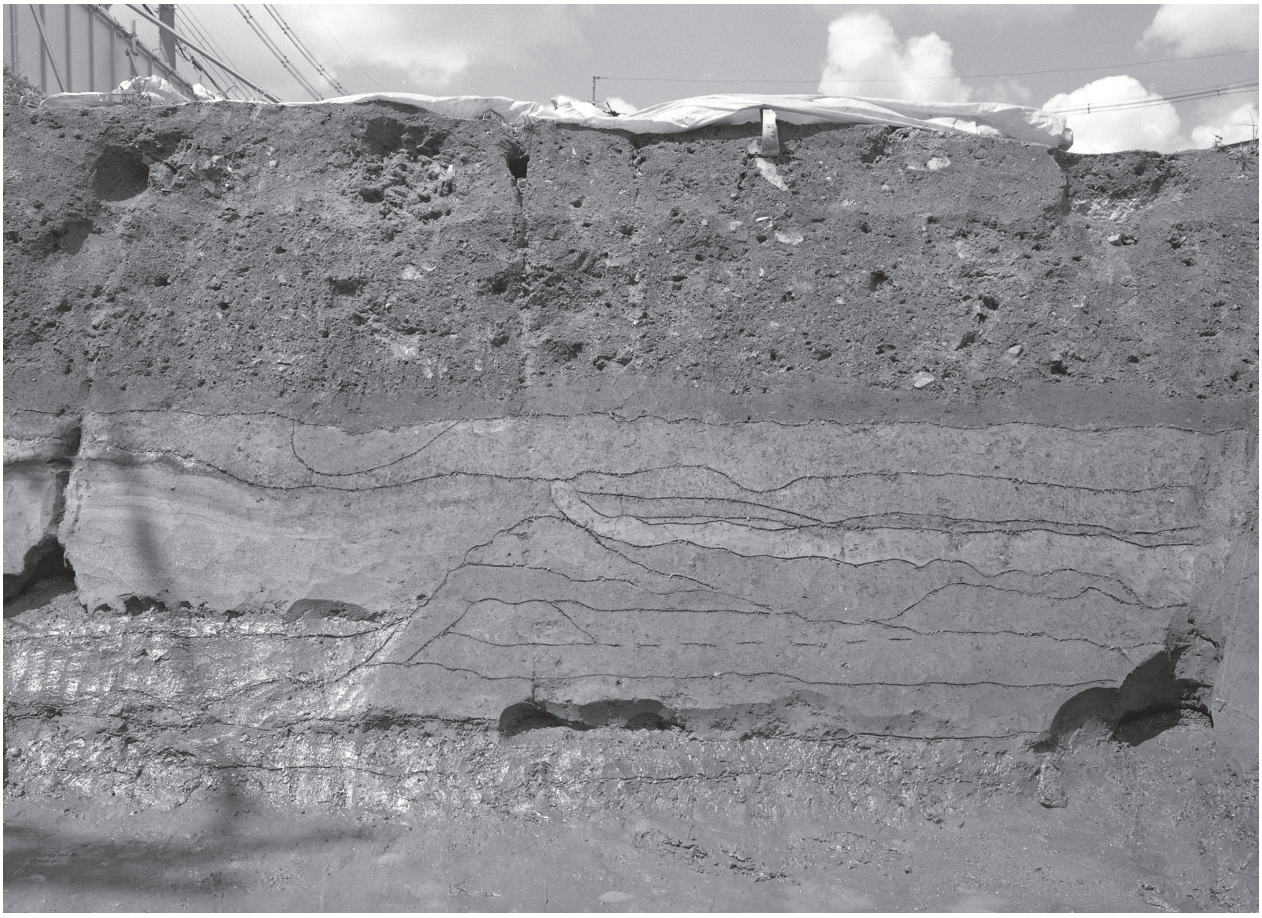
【主要参考文献】

・大阪府教育委員会　2005 『大県郡条里遺跡確認調査概要　恩智川（法善寺）多目的遊水地予定地の調査』
・公益財団法人　大阪府文化財センター　2013 『大県郡条里遺跡　寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
・公益財団法人　大坂府文化財センター　2015 『大県郡条里遺跡２　寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
・大阪府立近つ飛鳥博物館　2006 『年代のものさし　－陶邑の須恵器－』
・古代の土器研究会編　1992 『古代の土器１　都城の土器集成』
・小森俊寛　2005 『京から出土する土器の編年的研究　－日本律令的土器様式の成立と展開、７世紀～19世紀－』
・中世土器研究会編　1995 『概説　中世の土器・陶磁器』

写　真　図　版

図版1　大県郡条里遺跡　1区

1．調査区断面　現地表から第８ａ層（南西から）



2．1区　調査区断面　近世島畠と第３ａ面の畦畔（東から）

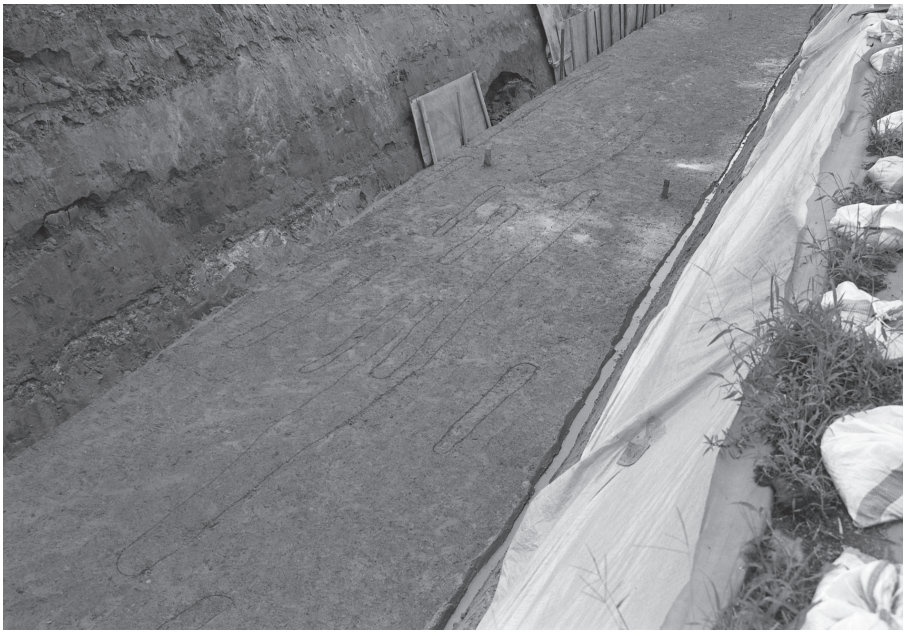
図版２　大県郡条里遺跡　１区

１．１区　第８ａ面　東半（東から）

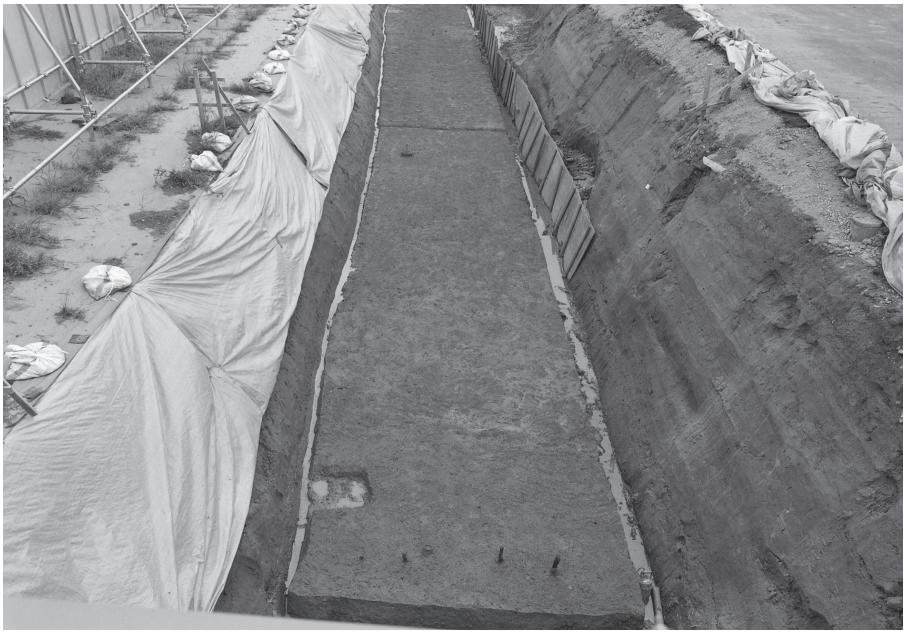
２．１区　第８ａ面　１坪境畦畔（南西から）

３．１区　第８ａ面（古）　１坪境畦畔（北西から）

４．１区　第８ａ面　西半（西から）



1．1区　第9ａ面
中央溝検出状況
（南西から）



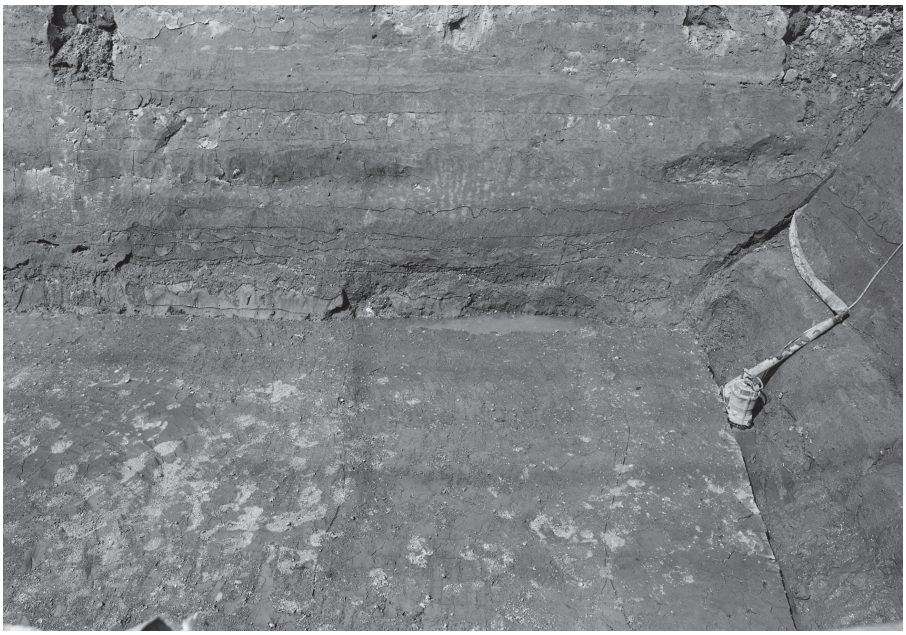
2．1区　第9ａ面
東半　（東から）

3．1区　1坪境畦畔
土器出土状況
（北西から）

図版４　大県郡条里遺跡　１区

１．１区　第 10 ａ面
全景　（西から）

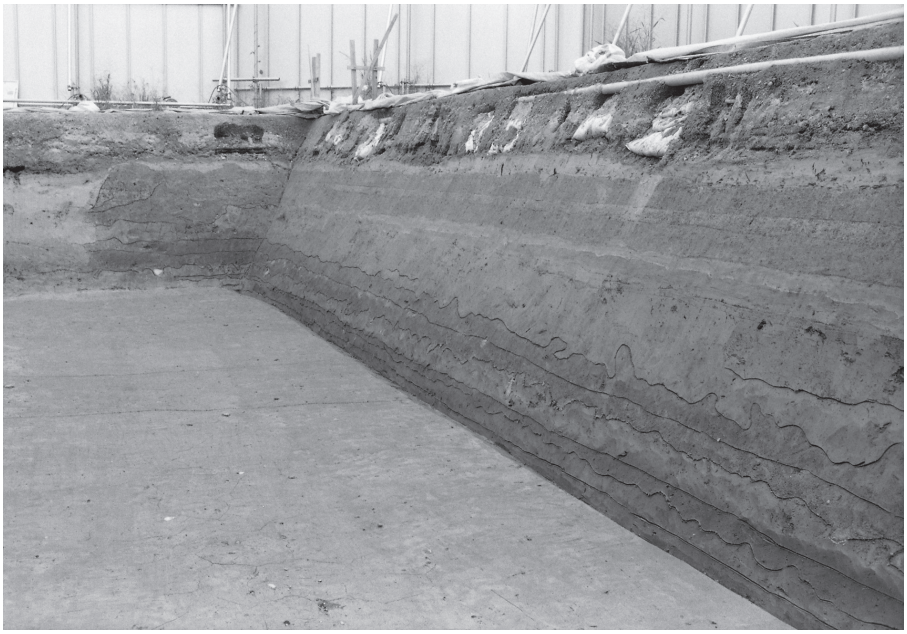
２．１区　第 10 ａ面
東側　（南西から）



３．１区　第 10 ａ面
４溝と坪境付近断面
（南から）

図版5　大県郡条里遺跡　2区

1．2区　調査区断面
現地表から第7－1ａ層
（北東から）



2．2区　調査区断面　東端
第7－1ａ層～第11ａ層
（北西から）

3．2区　調査区断面　東半
第7－1ａ層～第11ａ層
（北西から）

図版6　大県郡条里遺跡　2区

1．2区　東壁
近世島畠と第3ａ層
（西から）

2．2区　第3ａ面
東半　（西から）

3．2区　第3ａ面
西半　（西から）

1．2区　第7－1ａ面
西側　　（東から）

2．2区　第7－2ａ面
東半　　（東から）

3．2区　第8ａ面
西半　（西から）

図版8　大県郡条里遺跡　2区

1．2区　第8ａ面（古）
畦畔痕跡（南東から）

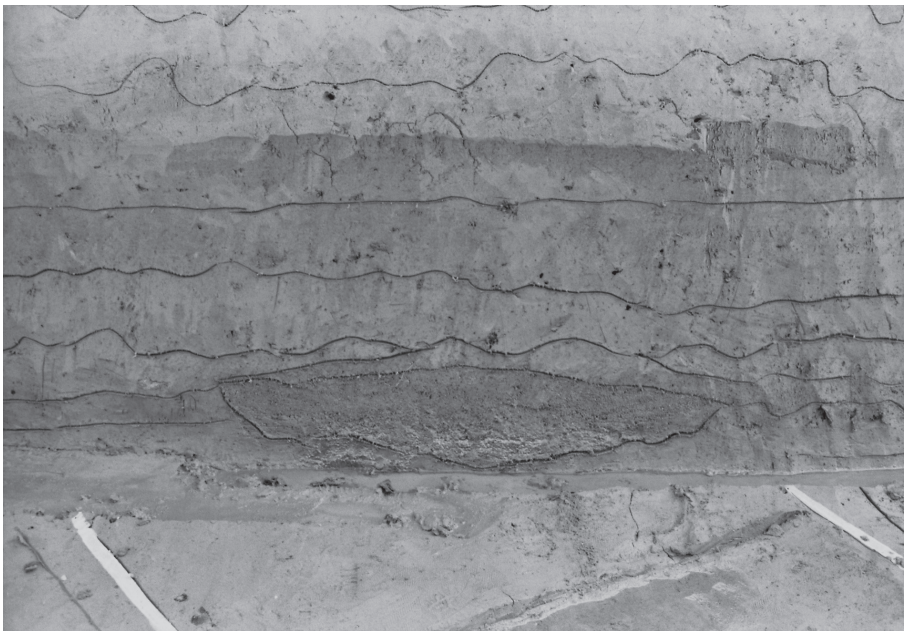
2．2区　第10ａ面
全景　（西から）

3．2区　第10ａ面　10畦畔（南東から）

4．2区　第10ａ面　10畦畔断面（北から）

１．２区　第 11 －１ａ面
全景　　（東から）

２．２区　７溝　断面
（北から）



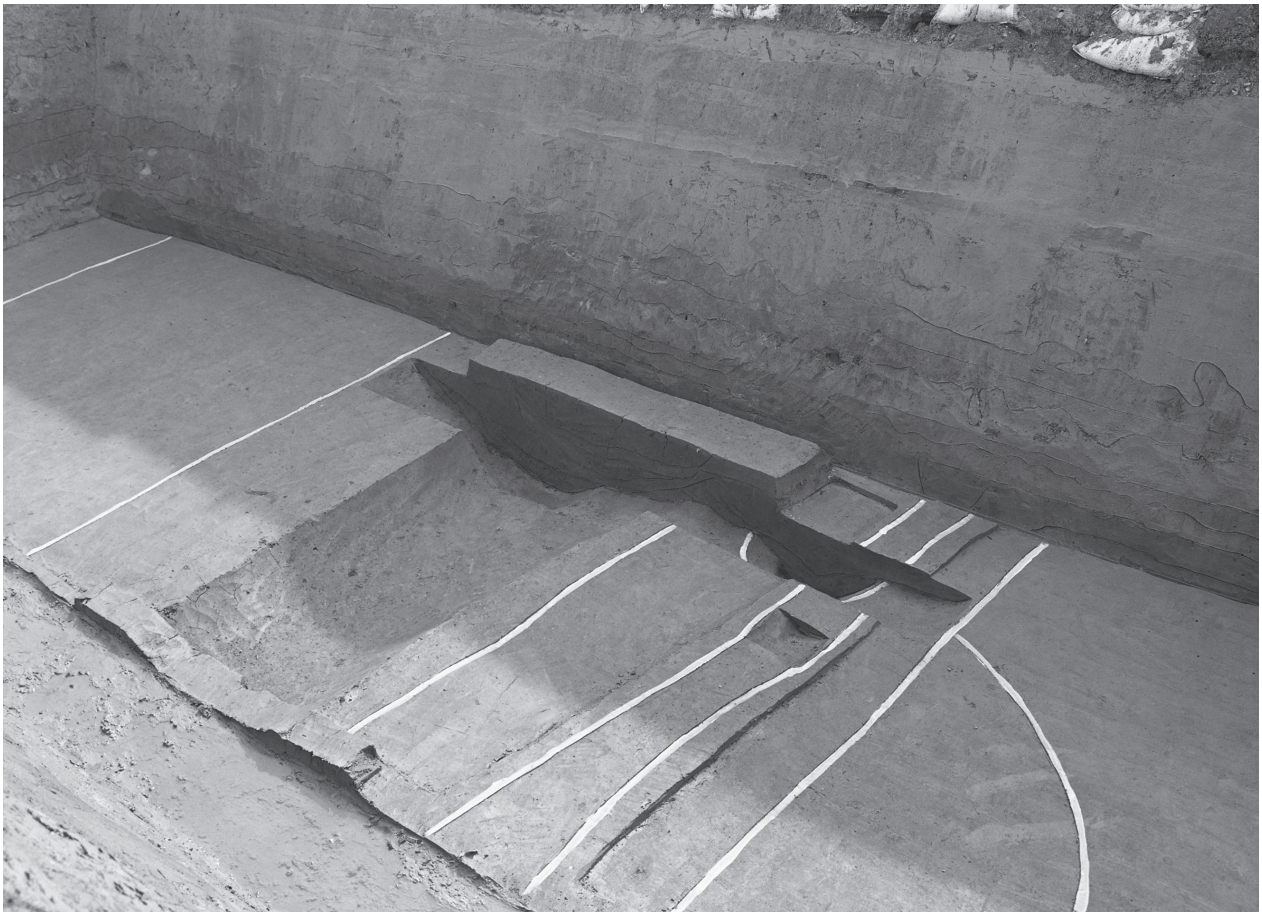
３．２区　８溝　断面
（北から）

図版10　大県郡条里遺跡　2区

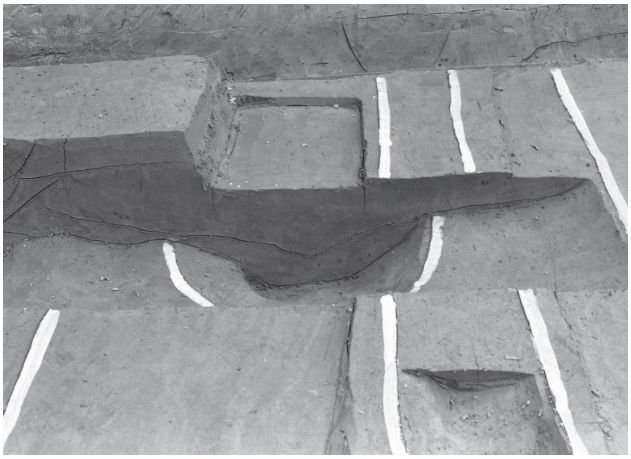
1．2区　第11－2ａ面
全景　　（西から）

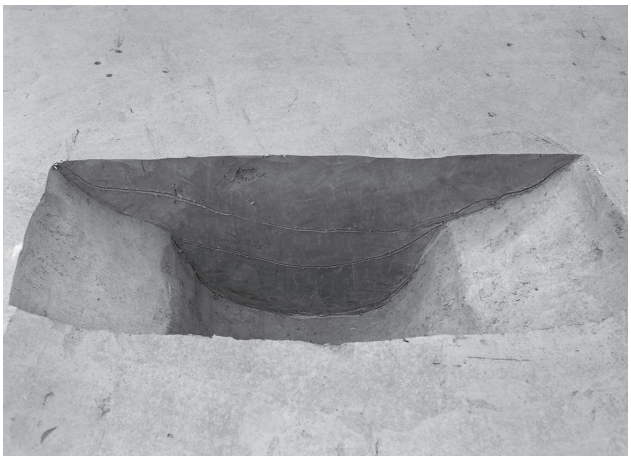
2．2区　第11－2ａ面　東半（東から）

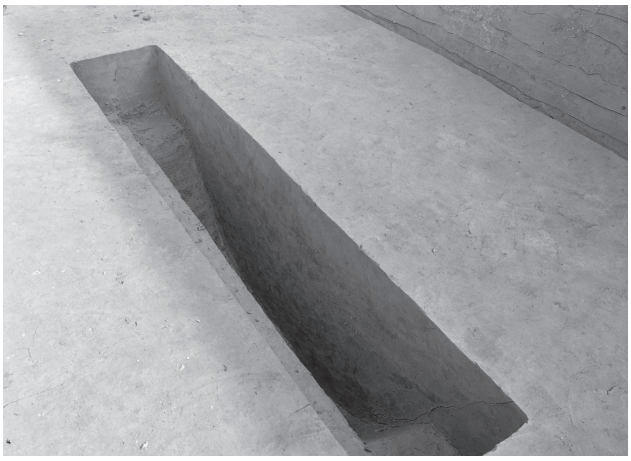
3．2区　第11－2ａ面　西半（東から）



1．2区　9・17・18 溝の切り合い（北西から）



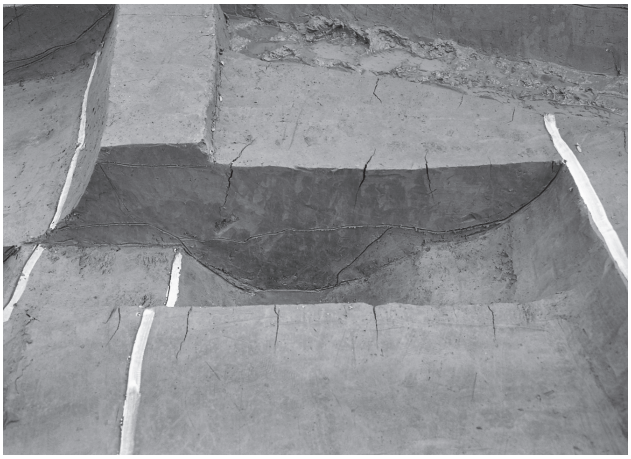




2．2区　9・17 溝　断面（北から）
4．2区　19 溝　断面（北から）

3．2区　18 溝　断面（北から）
5．2区　20 溝　断面（北西から）

図版12　大県郡条里遺跡　2区



1．2区　14溝　断面（北西から）
2．2区　11溝　断面（北から）
3．2区　23溝　断面（北西から）
4．2区　21溝　断面（北から）

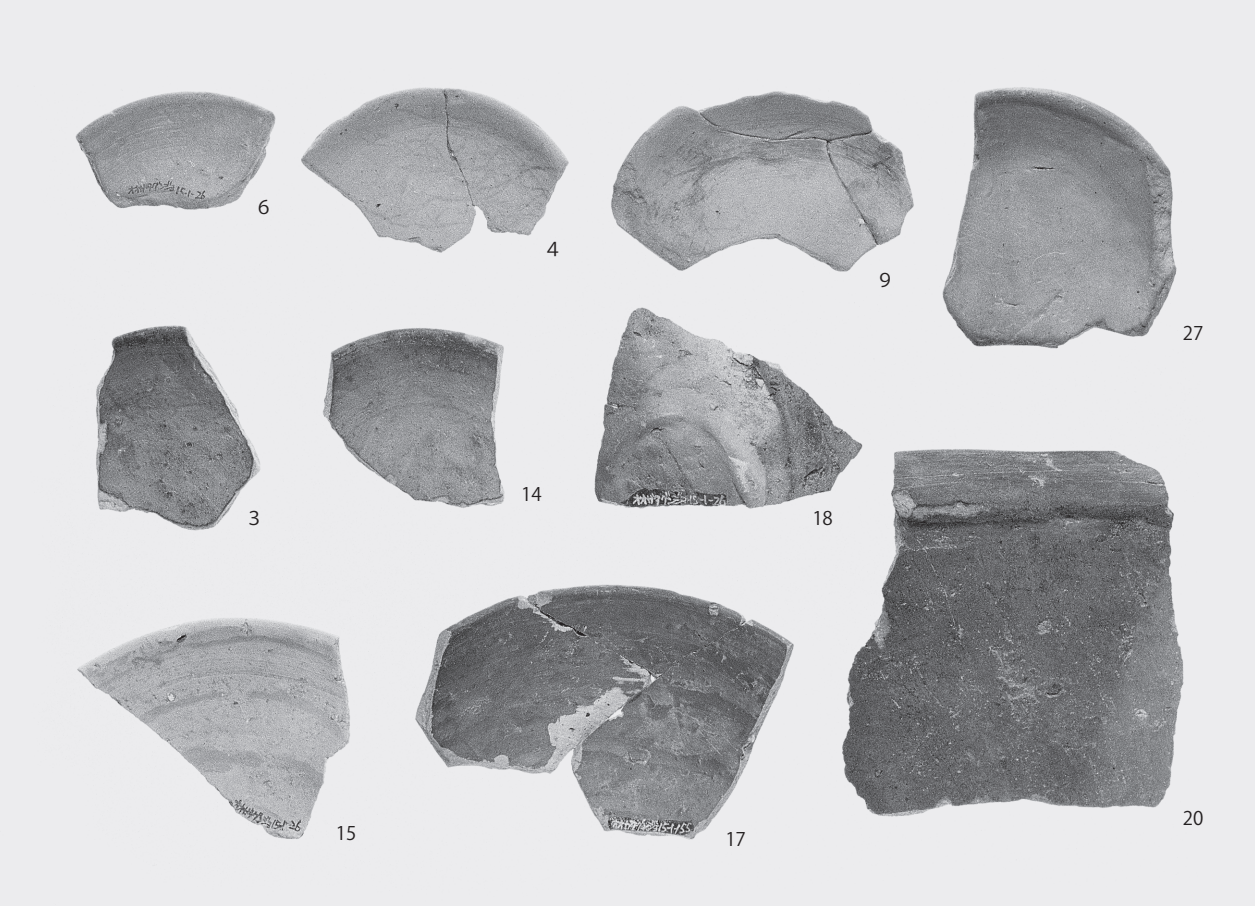
5．2区　第11－2b面　中央（南東から）

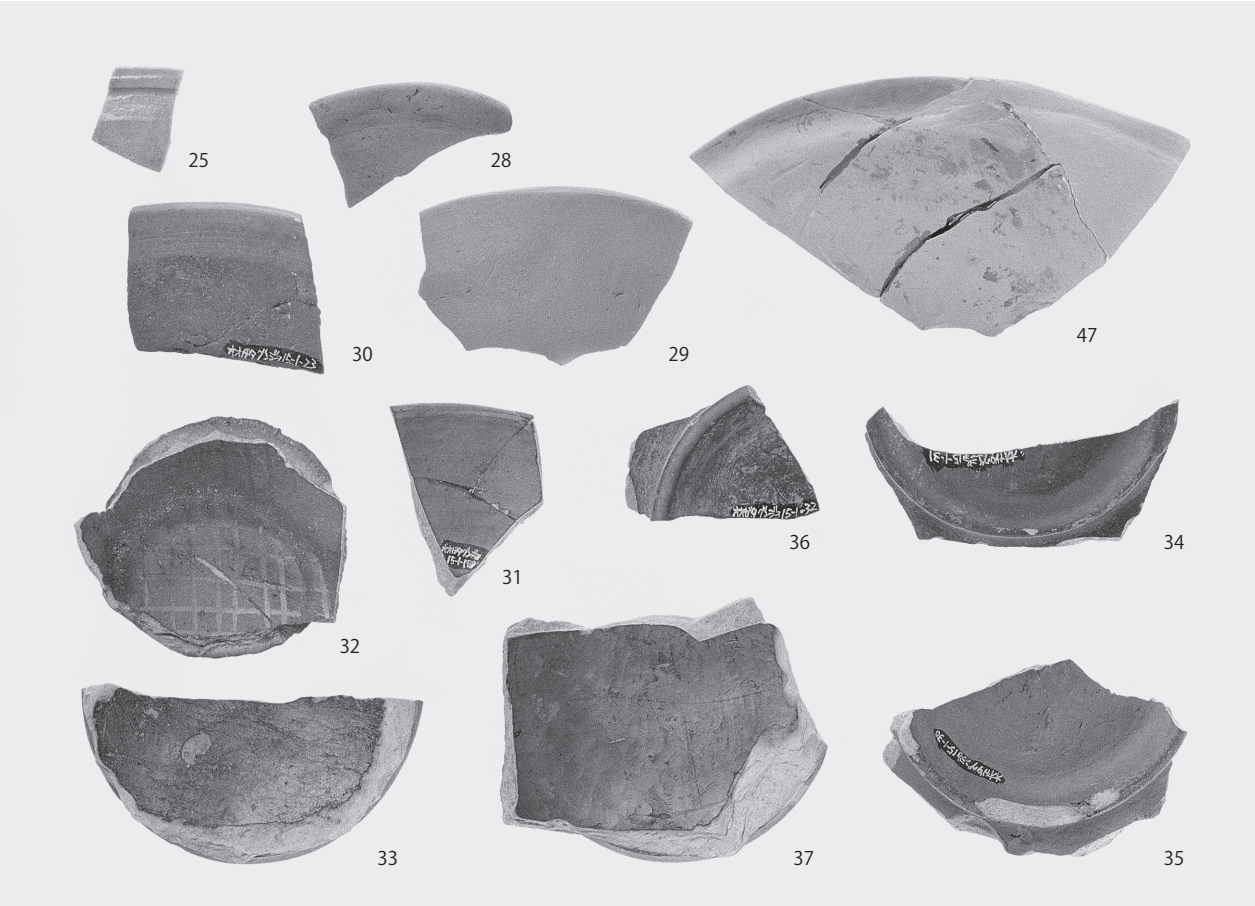
1．3区　第3ａ面
全景　（西から）

2．3区　調査区断面
西半　（北東から）

3．3区　調査区断面
東半　（北西から）

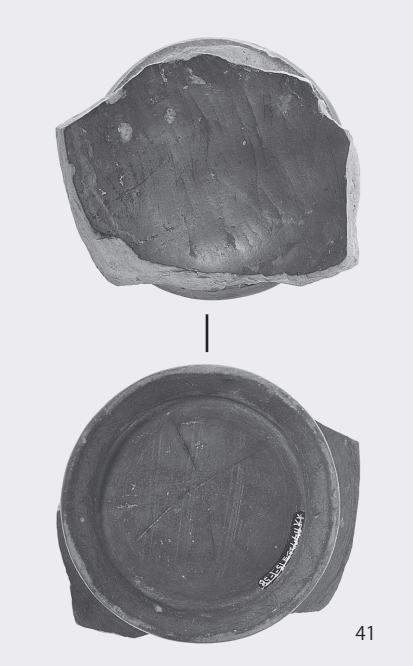
図版14　出土遺物（1）





図版15　出土遺物（2）

40


41

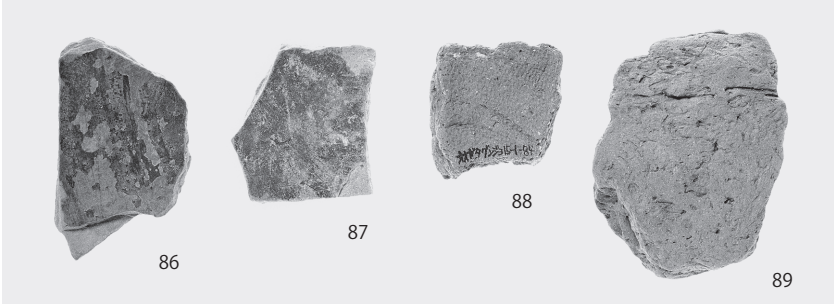
38

48

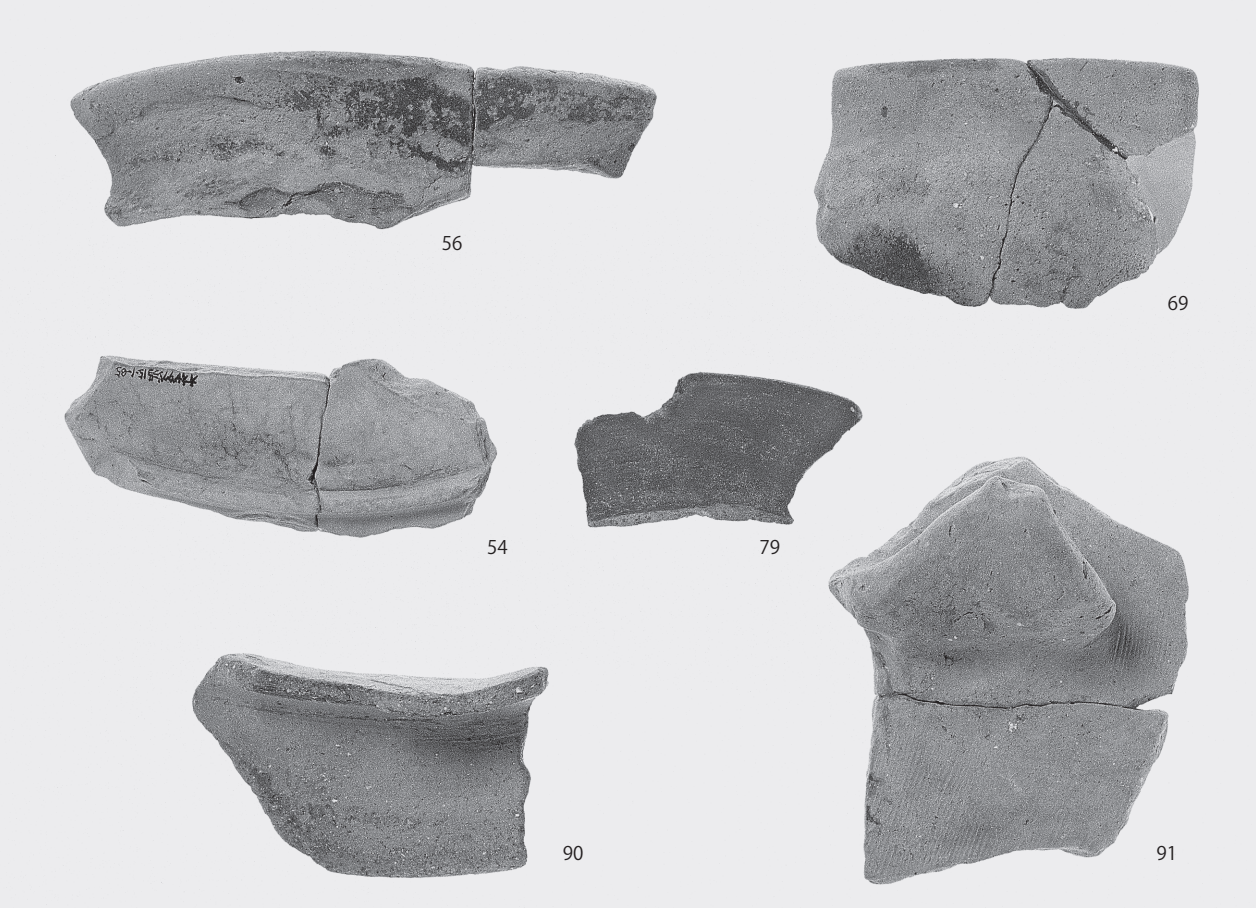
63

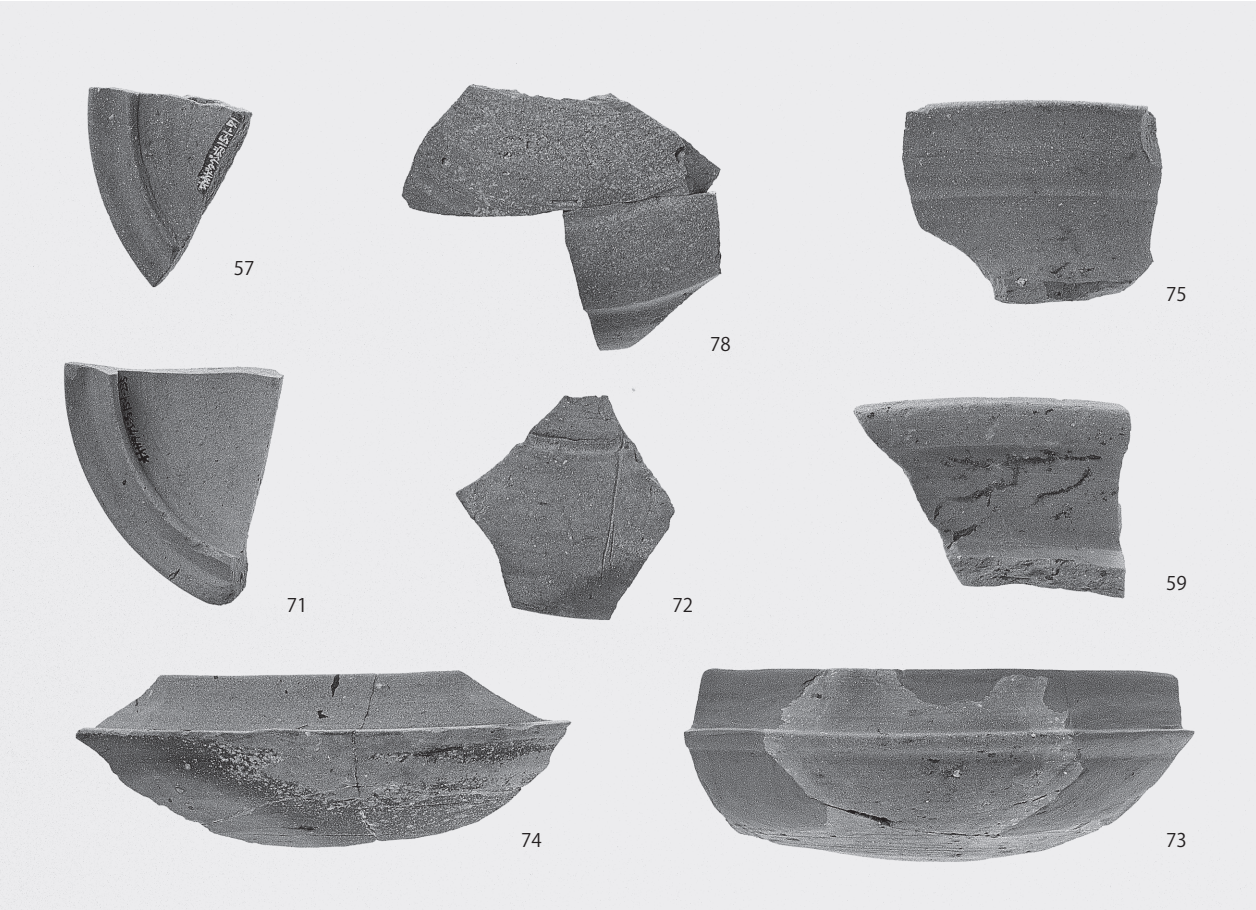
66

61


86 87 88 89

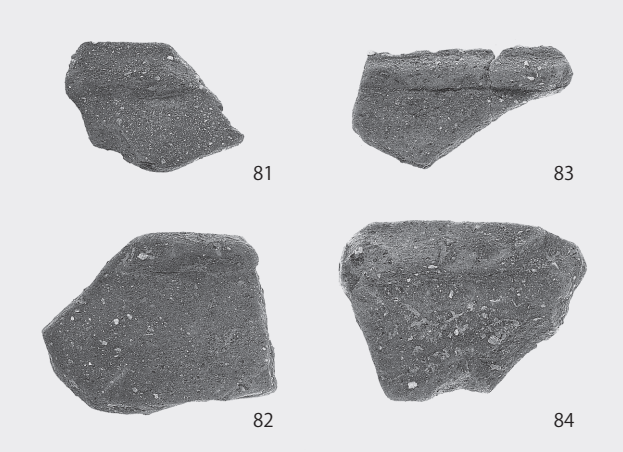
図版16　出土遺物（3）





図版17　出土遺物（4）

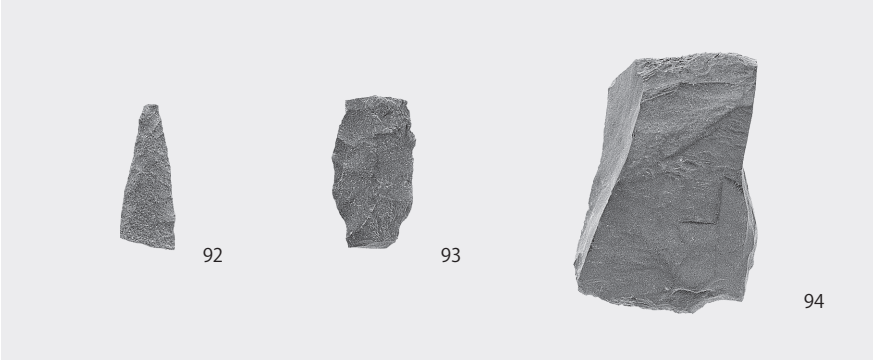
80


81 83 82 84

68

85

1


92 93 94

95

49

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおがたぐんじょうりいせき３・やまのいいせき
書名	大県郡条里遺跡３・山ノ井遺跡
副書名	寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第268集
編著者名	島崎久恵
編集機関	公益財団法人　大阪府文化財センター
所在地	〒590-0105　大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号　℡072(299)8791
発行年月日	2016年４月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おおがたぐんじょうり 大県郡条里 いせき 遺跡・ やまのい いせき 山ノ井遺跡	おおさかふかしわらし 大阪府柏原市 ほうぜんじよんちょうめ 法善寺４丁目 ちない 地内	27221	69・86	34° 35′ 53″	135° 37′ 42″	20150803～ 20151109	746㎡	恩智川法善寺 多目的遊水地

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大県郡条里遺跡	生産	古代～中世	条里畦畔・畠	土師器・須恵器・黒色土器・瓦質土器・瓦器・木製品	古代末から中世にかけて条里型地割に基づく水田及び畠を検出
	集落	縄文時代晩期～古代	溝・ピット	サヌカイト剥片・石斧・打製石器・縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・墨書土器・漆付着土器・製塩土器・瓦	縄文時代晩期～古代の溝を検出
山ノ井遺跡	生産	中世	畠		

要　約

今回の調査では調査区東側で溝を検出した。古墳時代前期～奈良時代頃のものと考えられるが、何度も掘りなおされていることが分かった。同様の溝は既往の調査でも検出しており、これを追認する成果となった。

平安時代～中世では複数の耕作面を検出した。周辺の調査成果より耕作地は条里に規制されたいわゆる条里型水田と考えられ、東西方向に長い地割が11世紀ごろより踏襲されていることが分かった。

また、坪境畦畔を検出し、12世紀以降、坪境が東に移動していることが指摘できた。

その他、耕作土中から「中家」と墨書された須恵器杯身や漆付着土器、製塩土器、軒丸瓦などが出土しており、古代には周辺に寺院や官衙などが存在していた可能性が更に高まったといえる。

公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書　第268集

大県郡条里遺跡３・山ノ井遺跡

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2016 年４月28日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号

印刷・製本 / 株式会社 明新社
奈良県奈良市南京終町３丁目464番地